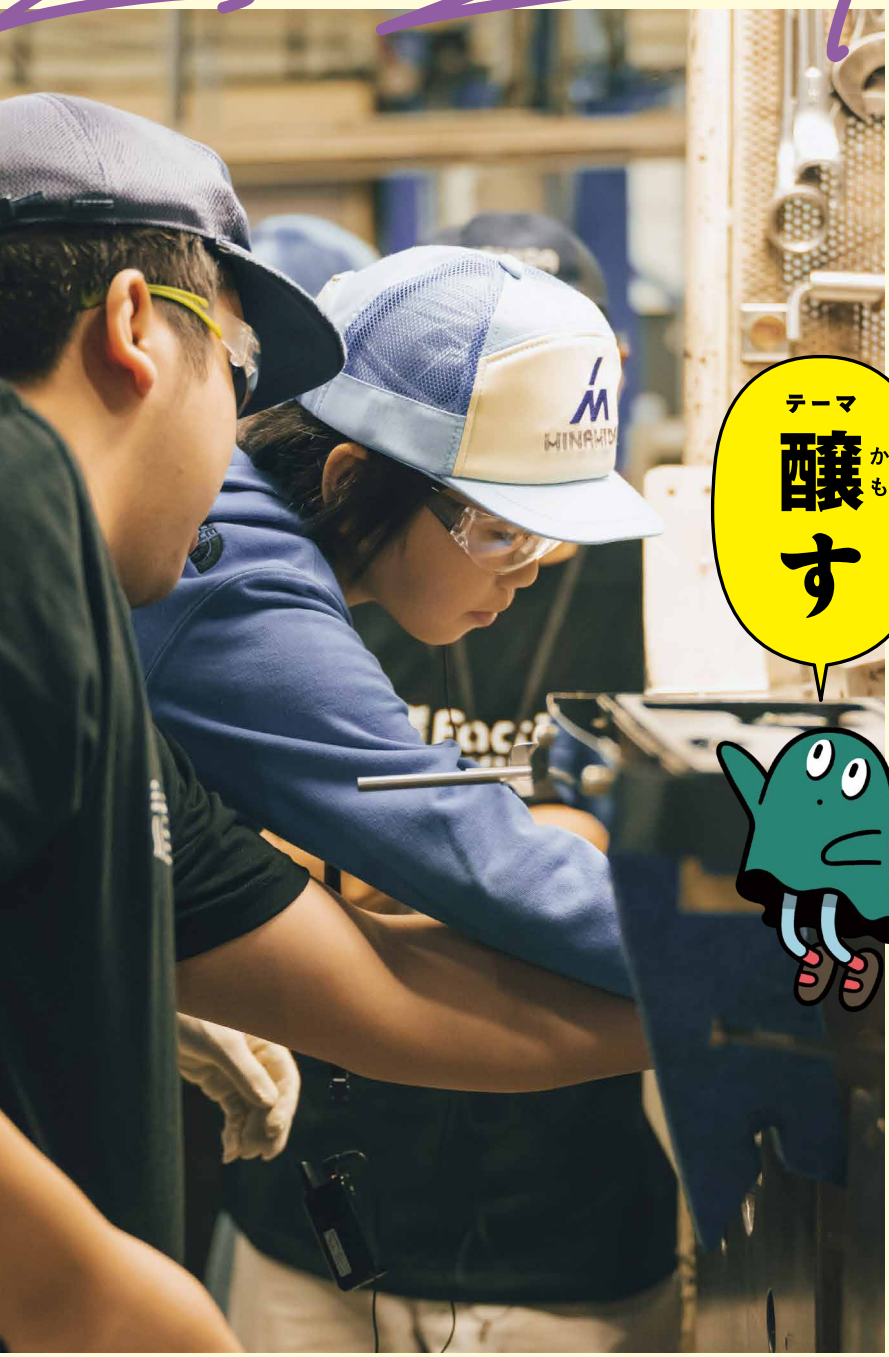
アトツギたちの文化祭

FactorISM 2024



Guide Book

FactorISM
アトツギたちの文化祭


近畿自動車道
JR八尾駅
八尾市役所


SOUTH FIELD.
【こうばdeマルシェ】開催場
BRIDGE WORKSチェックイン
もらう
+50
唐揚げ
小 300
大 500
焼きそば
¥500



Statement

FactorISM

2024年テーマ

「醸（かも）す」

「FactorISMアトツギたちの文化祭」は、2020年から始まり、「こうばはまちのエンターテインメント」を合言葉に、参加企業と来場者、地域一体型でつくるオープンファクトリープロジェクトです。イベント当日は、普段立ち入ることのできないものづくりの現場を一般公開し、世界に誇る日本のものづくりを五感で体験、体感できる文化祭のような催しが目白押し。

「まちのこうほうぶ」という「ものづくり企業の広報・人材育成研修」からスタートした本プロジェクトは、年に一度のイベントだけにとどまらず、通年、ものづくりの良さを伝えるために、ワークショップやこうば見学など体験プログラムを提供するコミュニティへと発展してきました。

その活動は、電鉄会社をはじめ、大企業や異業種とのコラボレーション、地域を越えたつながり、地元大学生の職業感の醸成など、広く「まちづくり」にも大きな影響を与え、まちの未来を創造する活動へと深化し続けています。

5年目となる2024年のテーマは「醸す」。総勢91社で地域のものづくりのルーツをたどり、語り継ぎ、地域の想いを紡ぎ、新たな文化を創り出すことで、ものづくりを醸成していきます。職人や作り手の技術、そして想いに触れ、驚きと感動とともに、こうばの面白さ、ものづくりを身近に感じる旅に出ませんか。

Contents

FactorISMでできる4つのこと
P.8

工場（こうば）の話
P.11

そもそも「こうば」ってどんな意味？
P.12

こうばから、商品が手元に届くまで
P.14

こうばをわかるための言葉
P.16

数字で見る大阪のものづくり
P.18

こうばに行く
P.20

さあ、今日はどんなものに出会おう？
P.22


迫力のある大きなもの
を見に行く
P.24


ずっしり！重量級
を見に行く
P.28


目には見えない小さな世界
を見に行く
P.32


Episode1
その熱は、こうばからまちへ炉と守り人の話
株式会社松徳工業所
P.36


Episode2
当たり前の仕事にプライドを真っ白な生地で紡ぐ伝統産業
角野晒染株式会社
P.40


触るの注意繊細さん
を見に行く
P.44


変幻自在のバリエーション
を見に行く
P.48


世界にここだけ！希少なもの
を見に行く
P.54


Episode3
非合理が広げる可能性産業機械の作り手に宿る信念
株式会社ユタニ
P.58


Episode4
伝統の和菓子がエンターテインメントになる日を夢見て
株式会社福壽堂秀信
P.62


縁の下の力持ち
を見に行く
P.66


この人の熱にあてられて
を見に行く
P.72


Episode5
堺の小さなまちこうばが鋳造で社会を支える会社になるまで
株式会社ヤナギモト
P.76


Episode6
守り抜いた伝統の味と、変わりゆく社会のあいだで
株式会社旭食品
P.80

開催イベント
P.84

トークイベント／展示
P.85

スペシャルイベント
P.86

スケジュール
P.88

エリアマップ
P.90

サテライト会場と、イベント
P.92

みつける
P.96

めぐる
P.103

はなす
P.108


Episode7
こうばも日夜変化する堺の風土に育まれた事業のカタチ
有限会社関西貿易
P.114


Episode8
一歩先んじる視点で金型とものづくりの未来をかたどる
株式会社ウチダ
P.118

応援パートナー
P.127

クレジット
P.128

How to Enjoy?

FactorISMでできる4つのこと



こうばであそぶ

1 こうばを見学する

FactorISMでは、開催期間中、まちこうばを自由に探索できます。脈々と地域で受け継がれる“まちこうば”と長年培ってきた職人技を間近で体験してみてください。

2 ワークショップに参加する

まちこうばが「エンターテインメント」に変わる4日間。各こうばでは趣向をこらし、ワークショップを開催します。普段は触れることのできない機械や体験できない技術を熟練のものづくり職人から教わることのできる滅多とない機会です。たくさんのこうばのワークショップをお楽しみください。

ご来場される方への注意

- 各こうばでは、スタッフの指示に従ってください。
- こうばによっては年齢制限（保護者同伴必須など）がある場合がございます。
- 写真撮影は、各こうばのスタッフに確認をとってから行ってください。
- こうば内は大きな機械などがあり、危険な場所もあります。動きやすい服装でお越しください。
- 各会場での事故やトラブル、本イベントでの怪我や感染症への感染、持ち物の紛失につきましては、主催者および各企業では一切の責任を負いかねます。
- 記録およびSNS等での発信のため、写真・動画撮影を行う場合があります。予めご了承ください。ご不安な方は、スタッフまでお声がけください。

ちいきをめぐる

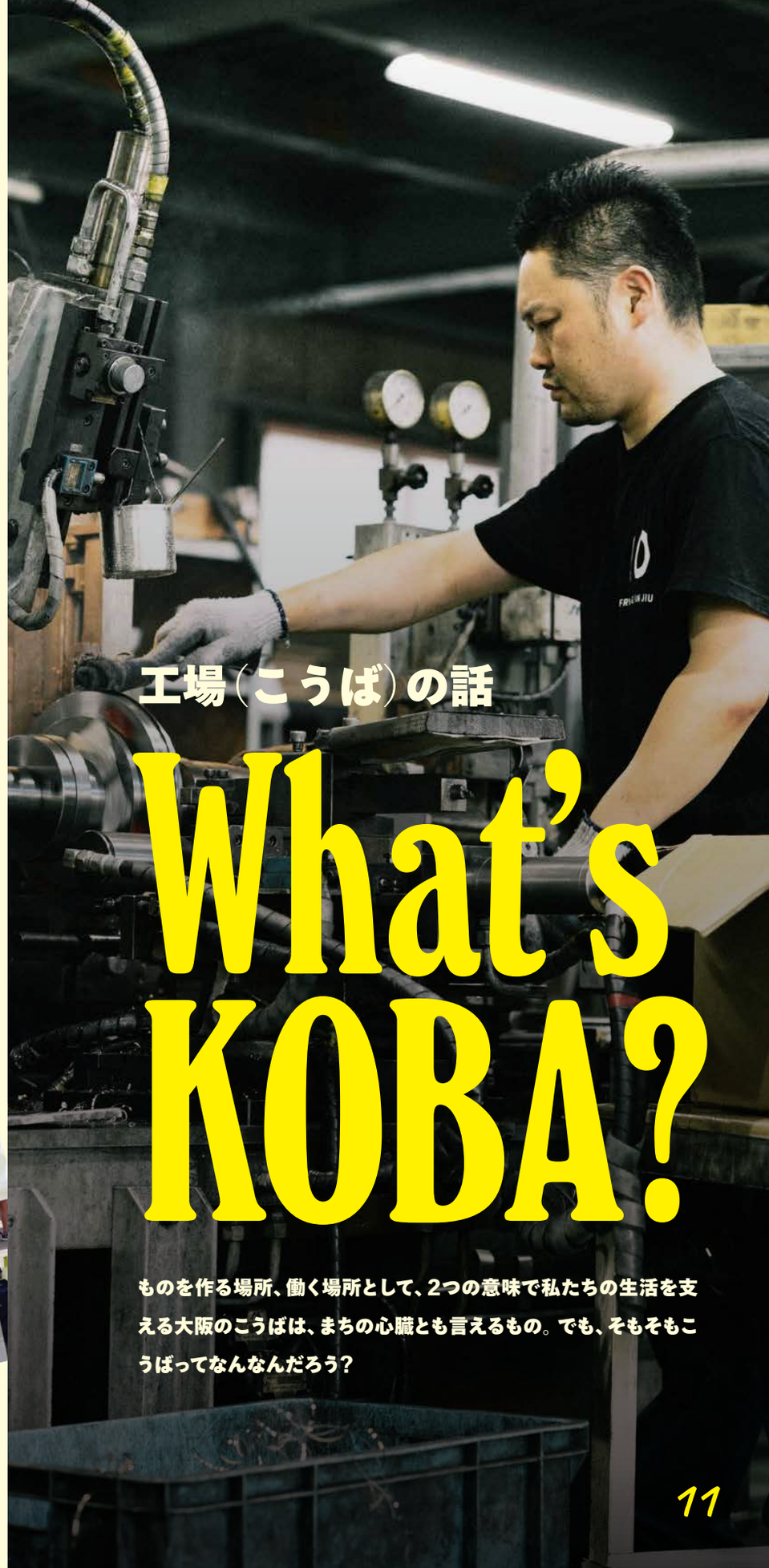
トークイベントを聞く

日本各地で行われるオープンファクトリーや地域のものづくりのお話を聞くことができます。あなたの視線を釘付けにする新しい発見があること間違いなし！ぜひご参加ください。

サテライト会場に行く

開催地域でサテライト会場をオープン！飲食や物販ブースを用意しているので、こうばでの体験に加えて地域をまるごと味わってください。FactorISM限定の商品や、ワークショップなど一日中楽しめます。





工場（こうば）の話

What's KOBA?

ものを作る場所、働く場所として、2つの意味で私たちの生活を支える大阪のこうばは、まちの心臓とも言えるもの。でも、そもそもこうばってなんなんだろう？

Meaning of Koba

そもそも「こうば」ってどんな意味？

工場

読み方：こうじょう、こうば
英　語：Factory

物を製造・加工・修理するため、必要な機械・器具を備えて労働者が作業に従う所。また、その建物。こうば。

大辞林

語誌

明治時代には「場」を訓読みするコウバも併用されているが、今日のスーパーマーケットのような「勧工場（かんこうば）」との混同を避けるためもあったか、コウジョウと呼ぶことの方が一般的であった。現代では、コウバはコウジョウに比べて小規模で、あまり機械化が進んでいないというニュアンスがある。

精選版 日本国語大辞典

音読み：コウ・ク
訓読み：たくみ・たくむ・わざ

工

①物をつくる。たくむ。また、しごと。わざ。「工作」「細工」
②物をつくる人。たくみ。「職工」「大工」
③「工業」の略。「商工」

なりたち

象形。さしがねの形にかたどる。工作・工人の意を表す。

音読み：ジョウ
訓読み：ば

場

①ば。ところ。事が行われる所。「会場」「戦場」
②とき。おり。「場合」「急場」
③劇の一くぎり。ば。「一幕二場」

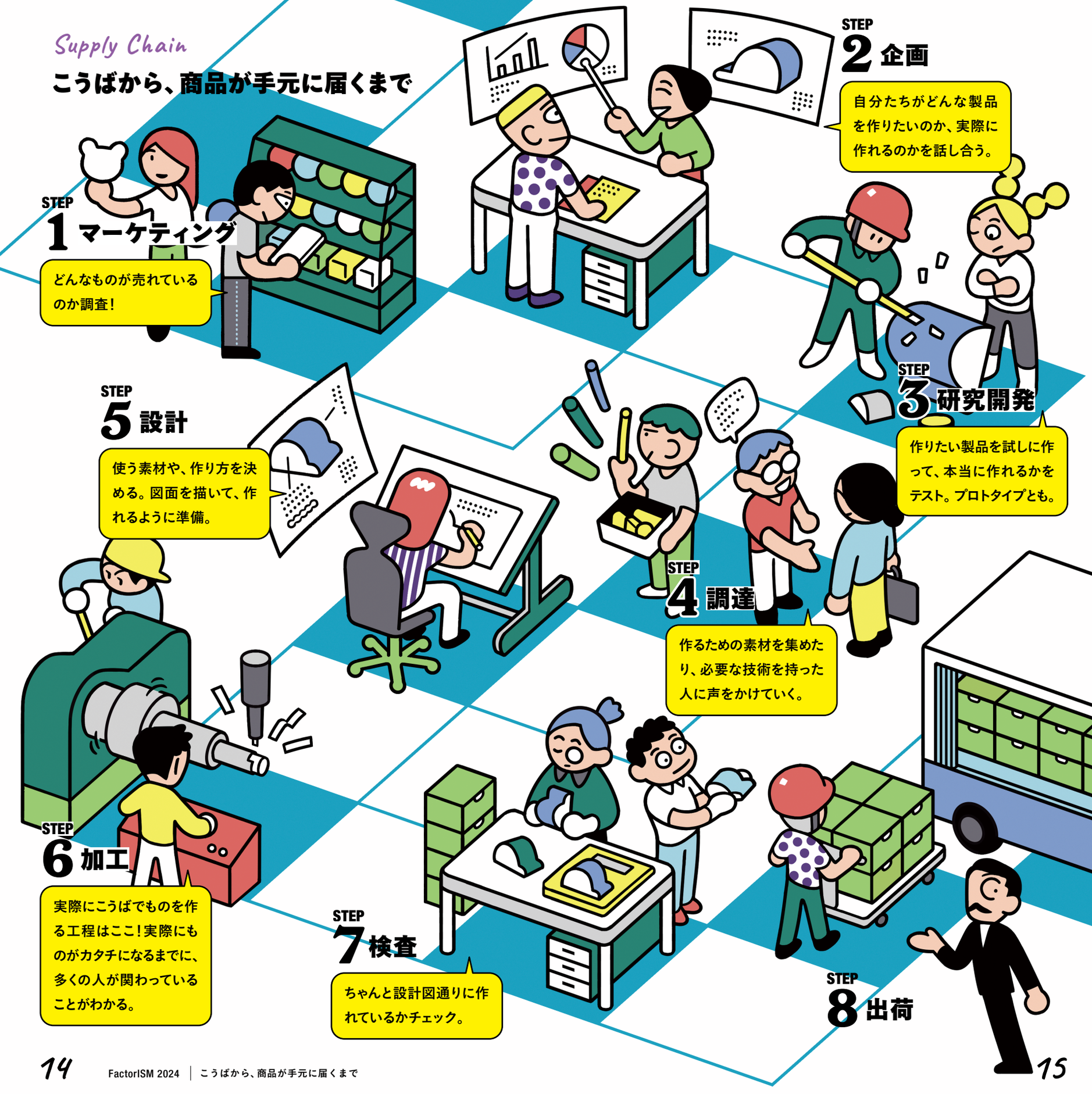
なりたち

形声。土と、音符昜（ヤウ）→（チヤウ）とから成る。祭りのためにはらい清めた土地、ひいて、場所の意を表す。

漢字ペディア

Supply Chain

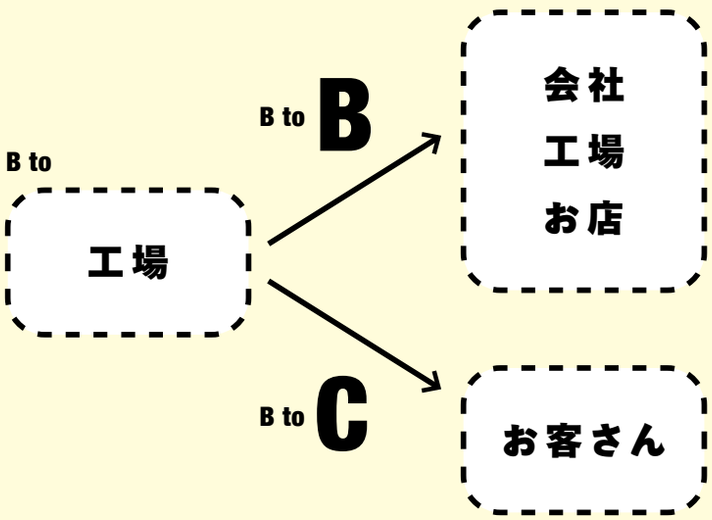
こうばから、商品が手元に届くまで



製品を
誰のために
作るのか？

BtoB BtoCってなに？

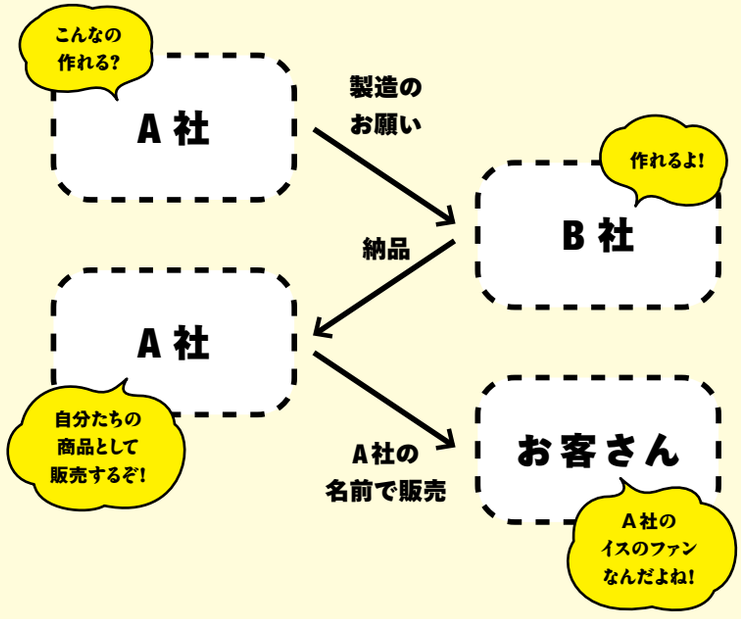
BtoBは「Business to Business（ビジネスからビジネスへ）」の略。BtoCは「Business to Customer（ビジネスからお客さんへ）」の略となります。つまり、完成した製品を誰に渡すのかで、こうばの仕事がBtoBか、BtoCか決まっていくのです。最近は、BtoBの会社が自分たちの高い技術を活かしてBtoCの商品を開発することに挑戦することも。



製品を
誰の名前で
売るのか？

OEMってなに？

OEMは「Original Equipment Manufacturing または Original Equipment Manufacturer」の略。「誰かのブランドの製品を、代わりに作ってあげること」を意味します。例えば、A社がオリジナルのイスを作りたいとき。自分たちで作れないから、B社の人にお願いをすることがあります。その時に、「A社の名前で、B社が代わりにイスを作ること」。これがOEMの商品となるのです。



Number of Osaka's koba

数字で見る大阪のものづくり

事業所数（こうばの数）

38,943事業所

3人までのまちこうばが全体の約40%。金属を扱うこうばが約20%ほどを占める。他にもものづくりのための機械を作るこうばや、プラスチック、食料品を扱う多彩なこうばが存在。

従業員数（働いている人の数）

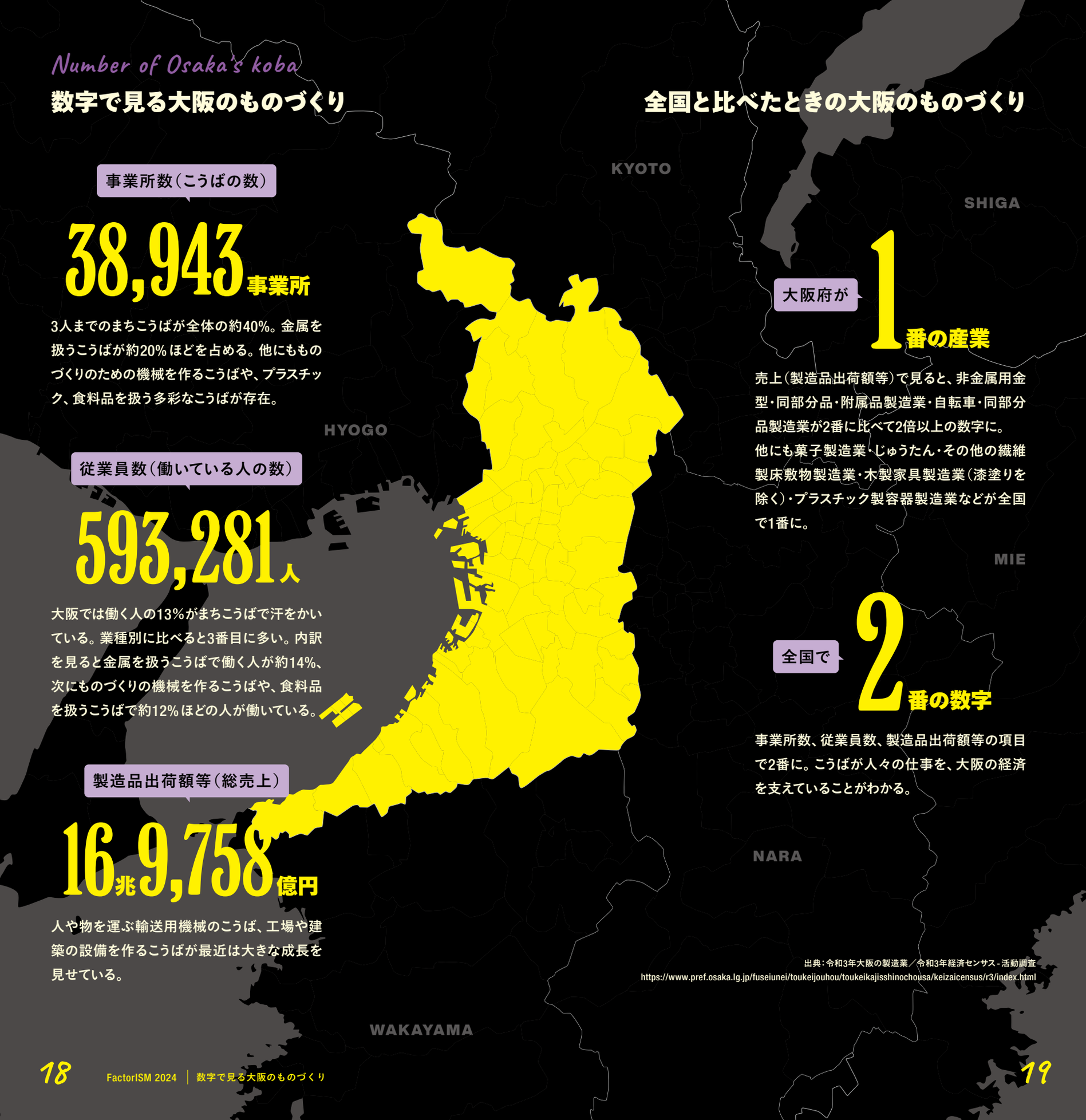
593,281人

大阪では働く人の13%がまちこうばで汗をかいている。業種別に比べると3番目に多い。内訳を見ると金属を扱うこうばで働く人が約14%、次にものづくりの機械を作るこうばや、食料品を扱うこうばで約12%ほどの人が働いている。

製造品出荷額等（総売上）

16兆9,758億円

人や物を運ぶ輸送用機械のこうば、工場や建築の設備を作るこうばが最近は大きな成長を見せている。



全国と比べたときの大阪のものづくり

大阪府が1番の産業

売上（製造品出荷額等）で見ると、非金属用金型・同部分品・附属品製造業・自転車・同部分品製造業が2番に比べて2倍以上の数字に。他にも菓子製造業・じゅうたん・その他の繊維製床敷物製造業・木製家具製造業（漆塗りを除く）・プラスチック製容器製造業などが全国で1番に。

全国で2番の数字

事業所数、従業員数、製造品出荷額等の項目で2番に。こうばが人々の仕事を、大阪の経済を支えていることがわかる。

出典：令和3年大阪の製造業／令和3年経済センサス-活動調査
https://www.pref.osaka.lg.jp/fuseiunei/toukeijouhou/toukeikajisshinochousa/keizaicensus/r3/index.html

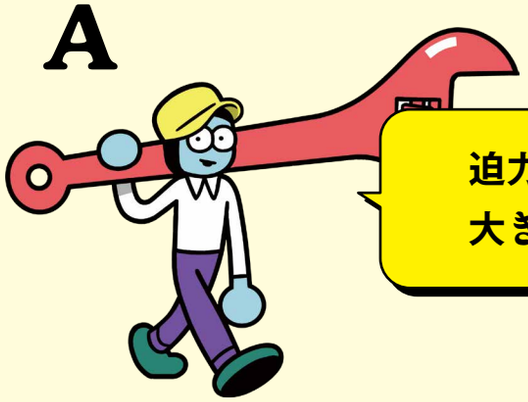


Let's go to the KOBA.

こうばに行く

さあ、今日はどんなものに出会おう？

A

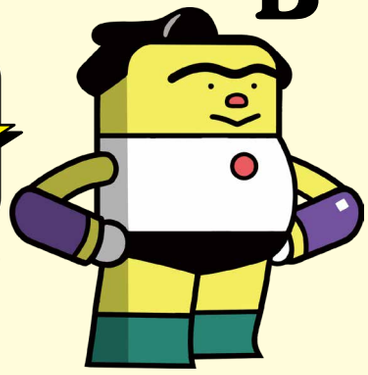


迫力のある
大きなもの

P.24へ

B

ずっしり！
重量級



P.28へ

C

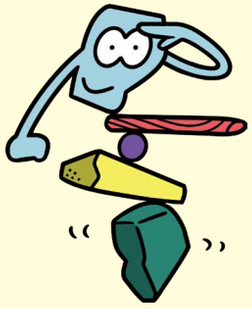


目には見えない
小さな世界

P.32へ

D

触るの注意
繊細さん



P.44へ

E



変幻自在の
バリエーション

P.48へ

F

世界にここだけ！
希少なもの



P.54へ

G



縁の下の
力持ち

P.66へ

H

この人の
熱にあてられて

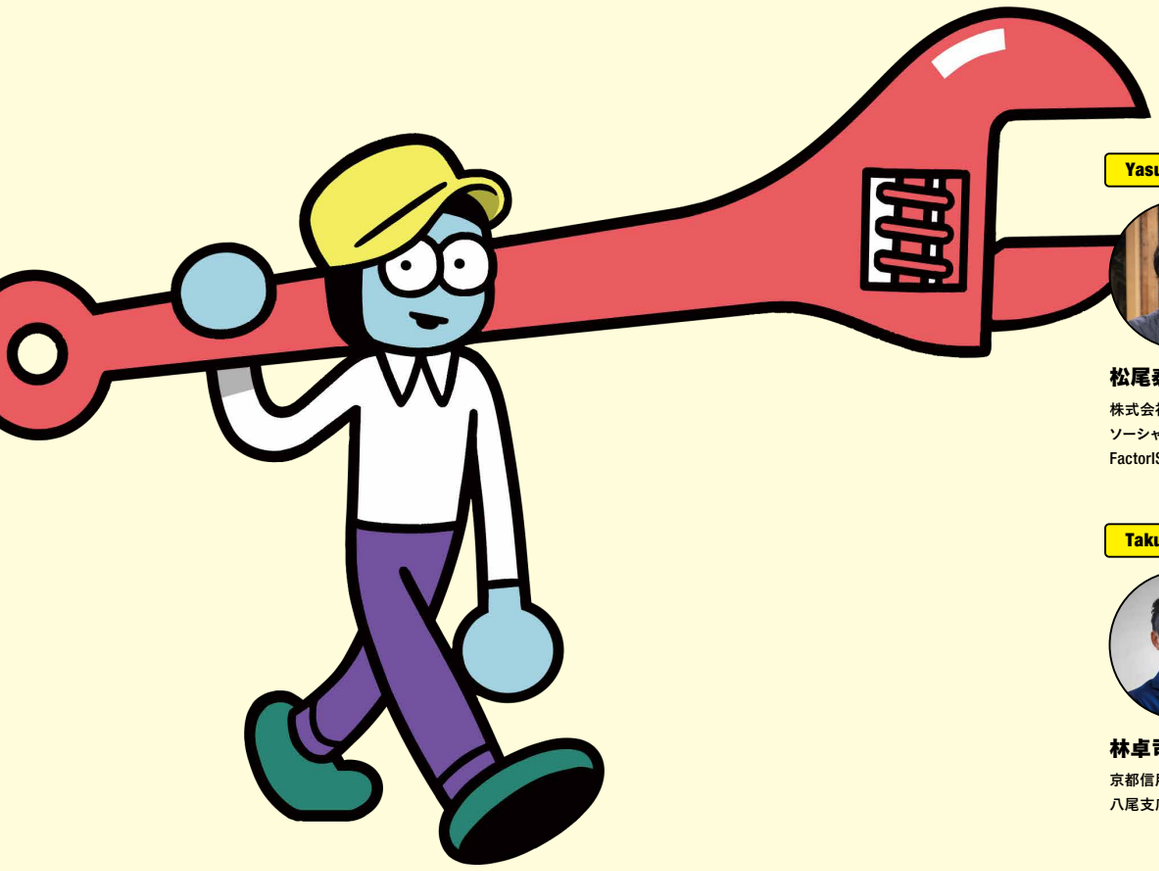


P.72へ

A

迫力のある大きなもの

を見に行く



一般的に「こうば」と聞いてイメージするものは、大きな機械が動いているところかもしれません。ここで紹介する会社では、「3メートルを超えるもの」を作っていたり、「大きな機械でしか作れないような製品」を作っていたりします。大きなものはそれだけで見応えあり。その存在感に圧倒されること間違いなしです。

Let's Enjoy!

事務局メンバーからの

おすすめの楽しみ方

Yasuki Matsuo



周辺地域の推し

JR八尾駅の近くにめちゃくちゃおいしい「とんかつマンジェ」というお店があります。朝から手書きの予約リストに名前を書き込む必要があって、土日は行列必至。県外からもたくさん人が来られます。日本には250銘柄の豚があるらしいんですが、店長自らが厳選した7つのブランド豚を食べることができます。ご飯も味噌汁もおいしいですよ。

松尾泰貴

株式会社友安製作所
ソーシャルデザイン部 執行役員／
FactorISM統括プロデューサー

Takuji Hayashi



推しのこうば

普段、生活で目にするゴミ収集車（塵芥車）。そのゴミを投入する箱や、消防車に搭載されている車両部品などを製造しているのが柳田製作所さん（No.9）です。私たちの生活に欠かせないモノを日々製造するにも、「発想力」と「想像力」が必要だとか。ぜひ、こうばに足を運んで社員さんが迫力あるものを生み出す姿を見てください。

林卓司

京都信用金庫
八尾支店 支店長

Sayuri Takashima



楽しみ方の推し

こうばの経営者が中心となって結成された「みせるばんど」。オープンファクトリーの醍醐味がちりばめられたオリジナル曲の歌詞を注目して聞いてみてください。また、YouTubeで見ることができるPVではこうばの中やFactorISM参加企業の社員さんも登場！こうばの様子やみなさんの素顔が垣間見れますよ！

髙島小百合

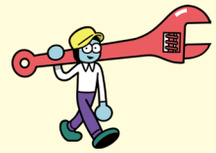
株式会社タカヨシジャパン
代表取締役

A 迫力のある大きなもの を見に行く

開催地

北エリア　中エリア　南エリア

※イベント開催地は会社やこうばの所在地と異なる場合がございます。



No.001 株式会社 M・C ケンマ



これからの大阪の顔となる「磨く」仕事

建築装飾金物や工業製品の表面研磨を手がける会社。2006年の創業以来、建築の装飾研磨から食品や医薬品の製造ライン、工業製品に至るまで幅広い分野に進出している。業界全体が高齢化する中、従業員の平均年齢が30代と若く、技術の伝達に積極的。

大阪府八尾市宮町6-5-8

No.002 大阪富士工業株式会社



溶射技術で日本一を目指す

金属やセラミックスをコーティングする溶射を行うのが仕事。腐食に強くしたり、摩耗に強くしたり、電気を絶縁させるような処理を施す。炊飯器のお釜にもこの技術が使われる。他の加工業同様担い手が不足がちだが、火力発電所や、電池など活躍する分野は広がっている。

大阪府高石市高砂3-69

No.003 栗原木工株式会社



伝統と革新で他社ができないものを作る

銭湯の脱衣棚からデザインオフィス、公共施設などの法人向けの家具から、個人の依頼までを受ける造作家具のスペシャリスト集団。若手と熟練工の融合、そして職人の技術と最新の機械を駆使した造形家具づくりが強み。2023年には東大寺1250年奉納プロジェクトに参加した。

大阪府門真市三ツ島5-19-2

No.004 株式会社コダマガラス



輸入から加工、販売までを一貫して行うガラスのプロ

創業46年の歴史を持つ、ガラスを専門とするこうば。大型の建築用のガラスを得意とし、オーダーメイドで加工・販売している。窓ガラスや扉、お風呂のガラス鏡、お部屋のパーテーションなど対応範囲は広い。ガラスのある暮らしをトータルで提案できる会社を目指して、日々技術を磨く。

大阪府八尾市南亀井町4-1-2

No.005 株式会社松徳工業所

取材記事あり！(P.36へ)



金属の性質を自在に操る現代の鍛冶師

1973年12月柏原市で創業し、移転を重ね現在の場所に。熱処理の方法は多岐に渡るが、細い薄い金属の熱処理で生じる変形をいかに抑えるかが腕の見せ所の一つ。社員は約100名ほど、うち約7割が国家資格である「熱処理技能士」を保有する「金属熱処理のプロ集団」。近年はサスティナビリティにも関心が高く、熱の再利用方法も開発中。

大阪府柏原市円明町1000-30

No.006 株式会社住まい工房 集



関わる人の“生きざま”が表れる家づくりを

木造住宅の新築工事、改修工事、耐震補強工事を専門に行う工務店。現代の技術と伝統技術を併せ持った大工に、木材を扱う上で必要な加工機と加工場（場所）が揃う。本物の素材を使った住まいづくりにこだわりを持ち、二代、三代に渡るお客さんとの付き合いも少なくない。若手大工の育成、技術継承にも力をいれる。

大阪府堺市南区高尾1-358-5

No.007 チトセ工業株式会社



プレス加工、ろう付け加工の高い精度が腕の見せ所

線材加工を軸に1962年に東大阪市立花町で創業。その後、事業を拡張し、現在は金属プレス、無酸化炉中ろう付けといった金属加工に加え、無線機器の自社開発を手がける。EV部品や文房具の部品製造など、身近なものづくりに携わっている。2019年の新社屋に移転。なくてはならないローテクで、ハイテク産業を支えている。

大阪府八尾市西高安町5-3

No.008 株式会社渚技研



食料から医療、建築までを手がける板金・溶接屋

平均年齢30代という渚技研の創立は2020年。にも関わらず、最新設備を惜しみなく導入したこうばは早くも3つになるという。製缶・板金・装飾・溶接・金属加工一式を主体に、ステンレス・アルミ・銅・真鍮・チタン等の薄板から厚物まで、幅広く一品一様の製品を小ロットでも製作を行っている。

大阪府八尾市北亀井町1-3-3

No.009 株式会社柳田製作所



幅広いサイズに対応、かなり頼れるまちこうば

1976年創業のまちこうばで、ゴミ収集車の部品や産業装置の金属製品を製造。現在では製造業のみならず、架装業（特殊車両の組立改造）、修理サービス業（特殊車両）にも業種を広げている。近年は自社ブランド「camp873」でキャンプ用品の企画・製造・販売も。

大阪府八尾市太田4-44-45

No.010 株式会社ヤナギモト

取材記事あり！(P.76へ)

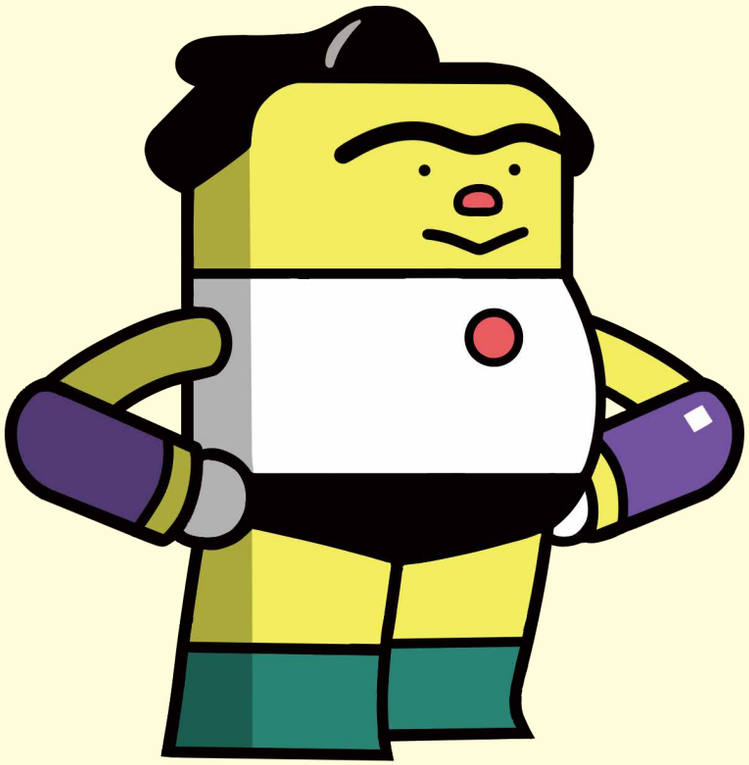


地道な挑戦の積み重ねで、会社を変える

ポンプ内で水に力を与えるインペラなど、社会インフラの心臓部で機能する鋳造品を供給してきた会社。ヤナギモトの複雑な形状の3Dインペラは競争力の高い製品として評価され、同業者でも「こんなの作れない」と諦めてしまうレベル。1954年に創業して以来、技術をつなぎながらアップデートを重ね、鋳造の可能性を切り拓いている。

大阪府高石市高砂3-17

B ずっしり！重量級を見に行く



ズシン。床が震えるような何百トンものプレス機を目の前にしたことはあるでしょうか？見上げるような位置から振り下ろされるプレスは、金属などの素材のカタチを永久に曲げてしまいます。そもそも機械そのものも重いもの。信じられないような重さでないとできないものがこの世界にはあるのです。

Let's Enjoy!

事務局メンバーからの

おすすめの楽しみ方

Norihito Nomura



野村範仁

NxN Design 代表
FactorISM 事務局長

周辺地域の推し

まちには様々な歴史や文化が混ざり合っています。堺だと50年前にできた伸栄鉄工（No.14）の目の前に約480年前に建立された月蔵寺が、関西貿易（No.13）の横には奈良時代に行基らが築いた土塔があったり。住宅も300年以上前の長屋から新興住宅地まであります。こうばを巡りながら、街々の歴史文化も感じてもらえると嬉しいです。

Yukihiro Mori



森雪尋

株式会社友安製作所
ソーシャルデザイン部
まちづくり事業／
ローカルプロデューサー
ディレクター

推しのこうば

自動車のボディの骨格部品を作るためのプレス金型を設計・製作しているのがウチダさん（No.12）。設計から加工・仕上げ・品質確認という緻密で細かい作業から目の前で行われる1600トンのプレス加工はもはやテーマパークのアトラクション。眼の前で起きるプレス加工は瞬きすることも忘れるくらいあなたの心を掴むこと間違いなしです。

Ikuno Goto



後藤伊久乃

八尾市 魅力創造部
産業政策課 課長

楽しみ方の推し

平安時代から始った「ふすま」文化。最低でも100年長持ちさせる、職人によって受け継がれた歴史の重みを感じさせる技が重量級！谷元フスマ工飾さん（No.77）では、住んでいる家の歪みをも加味し、新しい空間につくり上げていく過程が垣間見れますよ。昔、おばあちゃんの家で年末に障子を張り替えたことなど思い出してしまいました。

B ずっしり！重量級を見に行く

開催地

北エリア　中エリア　南エリア

※イベント開催地は会社やこうばの所在地と異なる場合がございます。



No.011 株式会社イイノ



全てのものづくりの原点を支える仕事

1902年創業。創業時は鎌鍛冶を生業としていたが、現在は抜型と裁断機の老舗メーカーに。革や布、ゴムや食品などを形状にカットするための刃物「抜型」と油圧式裁断機を製造し、日本全国へ納品している。アフターメンテナンスで信頼を築く他、近年は東南アジアへの展開にも力をいれる。

大阪府堺市堺区今池町2-10-26

No.012 株式会社ウチダ

取材記事あり！(P.118へ)



新しい車の販売の裏に、このこうばあり

1964年に大阪で創業した、自動車部品用のプレス金型を設計・製作する会社。競合他社も難しいとするハイテン材の成形技術で業界トップを誇る。中国とベトナムにも設計事務所を持ち、燃費のための自動車のボディの軽量化と、ぶつかった際の強度の維持という難しい両立に高い技術とチームワークで挑んでいる。

大阪府大東市新田本町12-6

No.013 有限会社関西貿易

取材記事あり！(P.114へ)



社名は貿易、仕事は製造、柔軟に

元は「輸出業」から出発した、機械設備を受注生産するメーカー。生産した設備は主に「こうばの中」で活躍し、こうばの作業を後押しする反転装置や昇降装置、搬送台車などの製造が得意。「明るく楽しく」をモットーに、技術の標準化や、人材の育成に注力中。

大阪府堺市中区土塔町2158-1

No.014 伸栄鉄工株式会社



3メートルから1000分の1ミリまでのものづくり

1968年創業の産業機械メーカー。箱詰めする梱包機械や、ラベルを貼る機械、自転車に使う金型などを作っている。伸栄鉄工で取り扱うものは大量生産が出来ないものばかり。それぞれの加工方法を試行錯誤することを楽しんでいる。派手なものはないが、信頼はある。堅実な100年企業を目指して今日も仕事に励む。

大阪府堺市堺区柳之町東2-1-23

No.015 真生印刷株式会社



アイデアを実現する仕事

1954年に創業した70年の歴史を誇る印刷会社。堺市に拠点を置き、カタログや取扱説明書、チラシ、パッケージなどの印刷物を中心に、Web制作や3Dソリューションもワンストップで提供している。チャレンジし続ける会社として、地域の大学との産学連携や、2025年大阪・関西万博への関わりなど、積極的な取り組みを展開中。

大阪府堺市堺区神南辺町5-152-2

No.016 株式会社タカヨシジャパン



ものづくりへの想いで、金属に真心を込める

八尾のまちこうばから、世界を相手に金属加工を行う会社。特に半導体製造に欠かせない「ターボ分子ポンプ」の翼を製造し、世界有数のメーカーに貢献している。ベトナムにも拠点があり、こうばごとの異なる得意分野を活かして、顧客と一緒になって課題解決に取り組む。製品への深い理解とこだわりが持ち味。

大阪府八尾市福栄町1-19-1

No.017 株式会社ミナミダ



鉄を削らない高精度なものづくり

創業91年の金属部品メーカー。金属を常温のまま秒で圧縮成形する「冷間鍛造」技術で、自動車用ボルト・ナットなど600種類以上を製造。日々、改善・成長をする／していく為の活動を大切にしており、自働化ノウハウを活かした協働ロボット販売・導入支援事業、冷間鍛造技術を活かしたBtoC自社商品事業も行う。

大阪府八尾市上尾町5-20-1

No.018 森脇鉄工株式会社



印刷業界を支える繊細な技術

創業者が印刷機を作る会社で働いており、その技術を活かし独立。印刷に必要な版（シリンダー）の元となる鉄芯と呼ばれるものを製造するように。印刷物は色の再現性や精度が求められ、1/100ミリ単位での仕上げを行う。リサイクルの事業も行っており、不要になったシリンダーを回収、保管し、要望に応じて再度加工を行っている。

大阪府門真市三ツ島6-22-1

No.019 株式会社ヤスオカ



歴史ある圧延機メーカーの新しいものづくり

1932年創業の圧延機メーカー。金属をロールで押し伸ばす圧延加工と、金属に文字や彫刻をするレーザー加工を得意とする。機械の設計から製造までを手がけており、圧延機の設計・製造では多くの技術者や職人が関わりながら、一つの機械を作り上げる。ものづくりへの情熱を、次世代に継承中。

大阪府柏原市国分東条町4331-1

No.020 株式会社ユタニ

取材記事あり！(P.58へ)

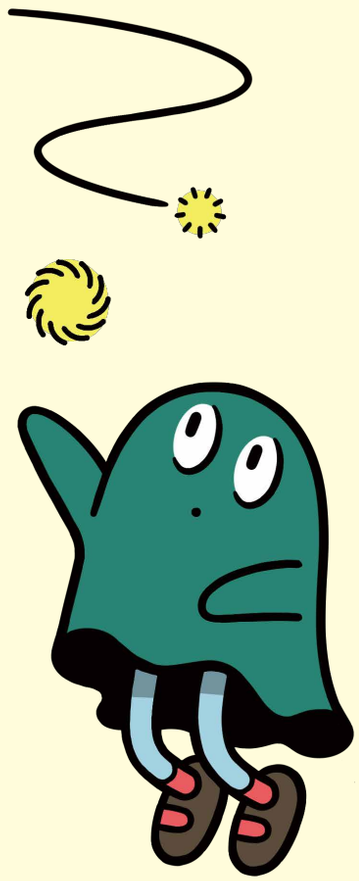


ものづくりの幅を広げるこうばの工場

1968年に自社設計のアンコイラー販売以降、コイルラインやトランスファーを7000台以上製作してきた自動化機械メーカー。オーダーメイドで制作し、自動車、住宅、建材、家電などのものづくりを日本国内外で支えている。電気制御、エンジニアリングまで一貫して仕上げられるのが強み。

大阪府八尾市太田新町4-88

目には見えない小さな世界を見に行く



大きなものがあれば、もちろん小さなものを作っているこうばもあります。小さなものを作るのに求められるのは、繊細な作業を実現する技術。機械に任せていれば誰しもが小さなものを作れるわけはなく、セッティング、使いこなすための技術や知識が必要です。ときには、熟練の職人の腕がないと実現できないものがたくさんあります。

Let's Enjoy!

事務局メンバーからの

おすすめの楽しみ方

Ryuji Fujita



藤田隆司

株式会社友安製作所
ソーシャルデザイン部
まちづくり事業

周辺地域の推し

ぜひ行ってほしいのが「鳥の鶏次」です。お盆や年末に行くと、地元の友人に必ずと言っていいほどばったり出会う、地元で愛されている鶏白湯のラーメン屋さん。人気な理由は関西ラーメンダービーという人気ラーメン店がおいしさを競う大会で3年連続準優勝したからなんです。並ぶだけのおいしさがここには詰まっています！

Masaki Terada



寺田昌樹

株式会社電通関西支社
プロデューサー

推しのこうば

0.015ミリメートルというほそ〜い金属の糸を、熟練の職人が手で織っていく「極細線製網技術」を駆使し、肉眼では絶対に見えない細か〜い海のゴミも救える金網などを作っているのが八尾金網製作所さん（No.25）。金属を織る職人の姿を見ることはもちろん、細かすぎるフィルターを使った特別なコーヒーを飲める機会があるかも！

Yasuki Matsuo



松尾泰貴

株式会社友安製作所
ソーシャルデザイン部 執行役員／
FactorISM 統括プロデューサー

楽しみ方の推し

6年間使い続けるものだからと良質な本革だけが使用されたランドセルを作るのが大阪生野の生田さん（No.23）。商品を購入すると、自分のランドセルの部品の一部を作るワークショップに参加できたり、「買ってありがとうございます」ではなく、「これから（6年間）よろしくお願いします」とお客さんに伝え続けている姿勢に脱帽です！！

C 目には見えない小さな世界を見に行く

開催地

北エリア　中エリア　南エリア

※イベント開催地は会社やこうばの所在地と異なる場合がございます。



No.021 株式会社アイキ



営業なし、納期と品質で信頼を得る

1998年創業の金属加工メーカーで、試作や小ロットの加工が得意。ほとんどの製品が1個～数十個の製造で、日々製作するものが変わっていく。板金加工からこうばをスタートし、創業時は小さな貸こうばだったものの「来た仕事は断らない」をモットーに事業を拡大中。平均年齢も若く、少数精鋭が揃う。

大阪府八尾市泉町3-61-5

No.022 赤坂金型彫刻所



1000分の1ミリの制御で彫刻を施す

1940年創業の金型彫刻の会社。伝統的な「半月一枚刃」を用いた繊細で精緻な彫刻や造形、射出成形金型を手がける。ジュラルミンや純銀から完全金属削り出しで装飾具や、大学と企業の研究室向けに特殊な実験部品を製作。どの製作にも初代の頃からの『赤坂式半月彫刻法』が基の「半月一枚刃」が活躍している。

大阪府八尾市楠根町5-57-11

No.023 株式会社生田



一生に一度の大切な相棒を子どもたちに

年間約4,000本の本革オーダーメイドランドセルを製造する、手づくりのランドセルメーカー。裁断から縫製、糊付け、ミシン掛け、組立、検品に至る300もの全工程を自社で手がけ、ユナイテッドアローズとのコラボも。ランドセルの選び方を楽しんでもらうために工房見学ツアーを実施し、職人技術の継承にも余念がない。

大阪府大阪市生野区田島6-2-16

No.024 マツバラ金網株式会社



見えないところもごまかさない

事業は1934年にスタート。その後、1961年にマツバラ金網製作所として創業、1976年に株式会社化をした。主にステンレスや真鍮、アルミ、チタンなどの金属線を用いた金網を製造している。機械や材料の伸線技術が進み、技術や品質が高まる中で、トレーサビリティシステムにこだわり、材料のロットまで遡って管理をしている。

大阪府松原市岡6-1-25

No.025 株式会社八尾金網製作所



数千、数万回と正確な作業を求められる世界

大正時代から工業用金網を作り続けている会社。金網は自動車部品や薬品、食料品、ろ過のフィルターなど多様な場面で使用され、多くのものづくりの現場を支える。継承されてきた職人の技術と織機によって作られる基幹製品「極細線織金網」は、指に出来たささくれ一つでも金属線が切れてしまうほど繊細。

大阪府八尾市跡部北の町3-3-15



Episode

その熱は、こうばからまちへ 炉と守り人の話

株式会社
松徳工業所

ネジやボルトなど、あらゆる鉄製の部品に欠かせない熱処理加工という仕事がある。それは、見た目だけではわからない、鉄の内側の強度に向き合う仕事。株式会社松徳工業所（以下、松徳工業所）で働くのは、いくつものチャレンジを重ね、失敗を失敗で終わらせない炉の守り人たちだった。

語り手
代表取締役社長／横尾臣則（よこおしげのり）
経営企画室室長／村井仁（むらいひとし）

こうばの「熱」は、24時間落とせない

日本刀の刃の部分を、火で焼いている様子を見たことはあるだろうか。松徳工業所が専門とするのは、そんな「熱処理加工」と呼ばれる仕事だ。鉄を加熱したり冷却したりすることで、ネジやボルトなどの鉄製部品の強度を変えていく。様々な取引先から部品を預かり、金属を硬くする「焼き入れ」や、反対に柔らかくする「焼きなまし」など、求められる強度に合わせて金属を加工する。こうした技術は、「熱処理技能士」という国家資格にもなっている。

こうばにある熱処理用の設備は、大型連休を除き、基本的には24時間稼働し続けているという。数多くある熱処理の設備の中でも圧倒的な存在感を示すのが、「真空炉（しんくうろ）」。その見た目はまるで大きな機関車のようだ。真空状態にされた窯の中で熱処理をするため煙が出ず、CO2の排出を少なく抑えられる特徴を持つ。

設備の中には、数億というお金をかけてカスタマイズしているものもある。「億単位の機械を物怖じせず投入できるなんてびっくりですよね」と、これには社員である村井さんも驚きを隠せない。「カスタマイズが原因で、使い始めたらトラブルばっかりなんてこともあります。だけど、冒険しないと作れるものの幅が広がらないん



ですよね」と、横尾社長は軽やかに話す。社長の肝の座り方にはこちらも面食らうが、より良いものを作るためのトラブルは失敗ではなく、前に進むために必要なことと捉えているようだ。

こうばの中には検査室もあり、中を見せてもらうと顕微鏡のような見た目の器具を使って出荷前の部品が一つひとつ検査されていた。一般的に、熱処理加工業者は加工した部品の中から数個だけを取り出して品質を検査する「抜き取り検査」を行うが、松徳工業所は扱う部品がそれぞれ異なるため、検査を機械で自動化できない。そこで、部品の運搬など機械に任せられる工程に設備投資をすることで、その分人の手でやるべき工程に集中できるようにこうばが作られている。大きな機械が激しく動いているこうばのイメージとは打って変わって、そこには人の丁寧さと繊細さが欠かせない仕事があった。



失敗しても簡単にはへこたれない。横尾社長のチャレンジ精神は、現場の社員たちにも脈々と受け継がれている。

嘘がバレない仕事だから

鉄の硬さや柔らかさは、見た目ではわからない。つまり、ミスや嘘がすぐにはバレないのだ。だからこそ、松徳工業所では何かあった時に正直に伝えることを大切にしているという。「人間なんで、そりゃあミスもします。大事なのは、そのことをちゃんと正直に伝えられるかです」と横尾社長。こちらの背筋も伸びるような話だ。

そんな松徳工業所の仕事への姿勢は、お客さんと歩んできた歴史の中で育まれてきた。「昔はいろいろと失敗もしてきたんですよ」と、横尾社長が過去を振り返る。売上を追求し、なるべく短時間でたくさんの部品を納品しようとしていた時代には、品質の良くないものが混ざってしまうこともあった。するとある時、取引先の会社が松徳工業所から納品された部品の再検査をするように。松徳工業所が部品の検査までを請け負っているにも関わらず、だ。

「取引先だけでなく、取引先のその先にいるお客さんのところまで行って部品の選別作業をしたり、時には夜中まで一緒に作業をしたりして。これじゃだめだと思いました。『しゃあないやっちゃなあ』と言われながらも現在まで取引が続いているのは、失敗した時にちゃんと向き合い方を改められたからだと思います。お客さんには迷惑かけましたし、たくさん勉強させてもらいました」

柔らかい横尾社長の表情の奥には、いくつもの壁を乗り越えてきた芯の強さを感じる。現在、松徳工業所と取引がある会社は付き合いの長い会社ばかり。その数は、全体の約3分の2にあたる。約50年の会社の歴史を経て、挑戦と失敗を繰り返す松徳工業所の社風がそこには息づいていた。





（写真左）熱処理の精度を追い求め、一般的な使用年数より早いタイミングで設備を入れ替えることで自社の強みを作る。（写真右）こうばの中で働く自動化装置からは楽しげな音楽が鳴り響き、まるでテーマパークのよう。「ちょっとでも楽しい方がいいからね」と、ユーモアを忘れない。

50歳二人、意気投合する

さぞ社歴が長いだろうと思っていた経営企画室の村井さんは、約1年前の50歳の時に松徳工業所に転職。以前は、奈良県内の市役所に勤めていた。松徳工業所は奈良県内にもこうばをもつ関係で、横尾社長が行政職員であった村井さんに人材紹介の相談を持ちかけたことが二人の出会いらしい。

何度か相談を繰り返すうちに横尾社長は村井さんの好奇心旺盛なところにビビッときたという。会社の事業や活動の幅を広げていきたい時期でもあったため、行政職員でありながら公私問わずいろいろなことに果敢にチャレンジしている村井さんは仲間に迎えたい人材だった。一方、村井さんも直感的に松徳工業所には合うものを感じていた。

「社長といろいろとお話しするうちに、年齢も出身大学も同じだったり何かと共通点も多く意気投合しました。仕事内容も面白そうなので、転職を決めましたね」

ものづくりの世界に触れてこなかった村井さんにとって、こうばの中は驚きと発見の連続だったという。

「熱処理をしないとネジ一つ使い物にならないことを、僕は50歳になるまで知らなかった。こうばの人たちは『僕らの仕事なんて誰も興味ないでしょう』って言うけど、世の中になくてはならない仕事だから、もっと自信を持ってほしいと感じます」

そう生き生きと話す村井さんの眼差しからは、こうばの人たちのものづくりにかける熱意を地域にもっと伝えていきたい想いを感じた。

松徳工業所では、こうばから出た排熱の活用やCO2の排出を抑えられる熱源の開拓など、本業である熱処理加工をベースにした新たな取り組みも進めている。中には、こうばから出た排熱を使って近隣の畑の農耕状態を改善するという展望も。以前は行政の立場からまちづくりに取り組んでいた村井さんは「これからはまちの事業者として地域の課題解決にも貢献していきたい」と続ける。松徳工業所の炉の守り人たちの熱は、こうばからまちの中へじわじわと広がっていきそうだ。



松徳工業所では社員全体の7割が資格を持っている。「資格があれば、うまくいかなかった時の原因も突き止められる」と横尾社長。他社と比べて、資格の保有率は高いという。

Go To Next!

Episode

当たり前の仕事にプライドを真っ白な生地で紡ぐ伝統産業

角野晒染

株式会社

「和晒（わざらし）」は約400年もの歴史を持つ、堺市石津川沿いの毛穴、津久野地域で発展した伝統産業だ。角野晒染株式会社（以下、角野晒染）は、和晒と染めの技術を約100年にわたり継承しながら、和晒で作られた手ぬぐいに新たな息吹を吹き込むことで、伝統的な文化を現代の暮らしに昇華させている。

語り手
代表取締役社長／角野孝二（かどのこうじ）
営業部 部長／南村健一郎（みなみむらけんいちろう）

生地を染めるために欠かせない仕事

私たちの身のまわりにある綿生地は、天然繊維である木綿を加工した糸を機械で織って作る。糸だけでは強度が不足して生地を織るときにブツブツと切れてしまうため、糸に糊をつけて強度を上げる必要がある。ただ、その糊と木綿に元々含まれている天然の油分が水を弾いてしまうため、そのままでは生地を染めることができない。そこで、それらの糊や油分のほか、不純物など余分なものを取り除いて真っ白な状態にすることを「晒（さらし）」というのだ。

現代では、洋晒（ようざらし）と呼ばれる加工方法が主流で、そのほとんどが大規模なこうばで行われる。機械に通された生地に圧力をかけて蒸気や薬剤を浸透させ、表面の毛羽（けば）を焼いて短時間で仕上げる洋晒の生地は、ツルツルとした手触りが特徴だ。一方、角野晒染が得意とするのは和晒と呼ばれる加工方法。和晒では、水が張られた大きな釜に生地を並べ、水流と蒸気、薬剤によって生地をゆっくりじっくり炊きあげる。1時間で仕上げる洋晒に対し、和晒には約4日という時間がかかるという。「毛羽を焼かずに残しているので、木綿本来の風合いを損なわずに仕上げることができます」と、角野社長。日頃私たちが身につけている服一着にも、様々な職人のこだわりが詰まっている。話を聞きながら、思わず着てい



る服の表面を触ってしまったのは私だけではないだろう。
また、角野晒染では晒だけでなく生地の染色も事業の柱の一つ。「ロール捺染機（なっせんき）」という機械を使った染め加工や、数年前からはシルクスクリーンでのプリント加工にも力を入れており、手ぬぐいや浴衣など、自社製品の販売も行っている。なんと、ロール捺染機は、角野晒染を含めて全国で数社しか稼働させていない貴重な設備。約100年続く老舗企業である一面を感じるエピソードだ。



晒加工をした生地のチェックでは、素人目では見逃してしまうようなわずかな汚れを見る必要があり、熟練のスタッフでも大変な作業だという。

「これしかできません」と言わない

実際にこうばを案内してもらうと、和晒の加工現場が早速目に飛び込んでくる。加工前と加工後の色を見ればその違いは歴然。4日間もの時間をかけて炊かれているだけあって、釜から出された生地は本当に真っ白だ。
次に目に飛び込んできたのは、染色に使うロール捺染機。まるでジブリ作品に出てくる機械のような空気感を醸し出しており、その趣から会社と共に歩んできた長い歴史を感じる。ロール状の金型に図柄が彫刻されていて、彫刻された場所以外の余分な染料を大きな刃でこそぎ落とすことで、図柄が生地にプリントされるという仕組みだ。「綺麗に染めるためには、実はこの刃が重要なんです。染料をこそぎ落とす作業は機械で自動化されていますが、その刃を研ぐためには職人技が欠かせません」と、角野社長。染めの作業に刃を研ぐ技術が要になるというのは意外だった。
熟練の職人技について語るその隣で、最新のシルクスクリーン機が一定のリズムを刻みながら、真っ白な生地に模様を描いている。その様子を横目に角野社長は「伝統産業の業界って、お客さんからの要求に『できるわけない』の一言ですまそうとする傾向があると思うんです。僕たちは『これしかできません』と言わず、お客さんとコミュニケーションしながらものづくりをしたいと思っています」と話す。全てを工業化することが難しい伝統産業の世界では、ある専門的な技術に特化してものづくりをしている企業も多い。しかし、角野晒染はお客さんの要望に向き合うことで、新たな考え方や技術も取り入れていく姿勢のようだ。





（左）過去に手ぬぐいを主役にしたイベントを開催した際、手ぬぐい染め体験のブースが人気だったことも、角野晒染で工房をオープンするきっかけになったという。（右）角野晒染のこうばの隣には石津川が流れており「かつてはこの川でバシャバシャと生地を洗っていたんだと思いますよ」と、角野社長。約400年続く地場産業ならではのエピソードだ。

古きと新しきのかけ算で、伝統産業を未来へつなぐ

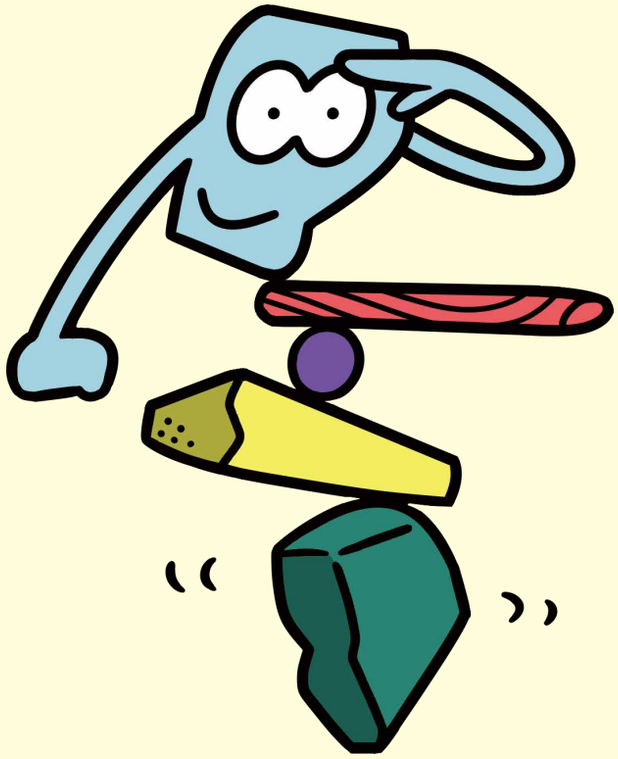
角野社長の想いを形にするため、ともに汗をかいて活動してきた一人が南村さんだ。地元の同級生という間柄でもある南村さんは、前職の経験を活かして営業を担当するほか、新規事業を角野社長と考えることもあるという。
「和晒をどうやって後世につないでいくか、まだ見ぬヒット商品をどうやって生み出すか。そんなことを常に考えています」
会社にかける熱意は、角野社長にも負けずとも劣らない。
角野晒染のギャラリーには、手ぬぐいや浴衣など、どこか懐かしさを感じる商品がずらりと並ぶ。その一方で、シャツやパンツなどの現代的なアパレルや商品も陳列されており、古きと新しきが入り混じった心地よい空間を演出している。その理由を聞いてみると、「このままじゃおもんないなって思ったんです」と、角野社長。大学卒業後から3年間勤めた会社を辞め、27歳で家業である角野晒染に戻って来た時、率直にそう感じたという。晒染の現場で5年間経験を積んだ後、会社の代表となった角野社長は、仕事内容に目新しさや面白みが少ないことが原因で、同年代の働き手がすぐに辞めてしまうことに頭を悩ませていた。そこで、会社のメンバーで何か面白いことをやろうと始めた取り組みの一つが、この自社ブランド事業だという。
他にも、角野晒染では2021年3月に染め物体験ができる工房もオープンした。
「一番最初のお客さんは、女子大学生2人組でした。初めてのお客さんにどう接して良いか分からず、タジタジしていましたね」と、角野社長が思い出の笑い話を振り返る。初めこそお客さんが少なかった工房も続けること3年、口コミやリピーターが増え、今では海外からの団体客も受け入れるまでになった。「お客さんが喜んでくれていることを実感できる瞬間が何より嬉しいです」と、角野社長はにこやかに話す。
新たな取り組みにも力を入れる一方で、彼らは伝統産業としての誇りと、その産業を育んできた地域への眼差しも忘れない。
「受け継がれてきた当たり前の作業にきちんと向き合う。そして、この産業を育ててくれたこの地域とともに会社を育てていく。地域あっての産業だからこそ、そこにプライドを持つことがやはり一番大事です」
そう語る角野社長の言葉には、革新的でありながら伝統産業たる所以を誰よりも大事にする意志がはっきりと宿っていた。



手ぬぐい文化が主に関東圏に根付いていることを受け「ハンカチやタオルと同じレベルまで、関西でも手ぬぐいのイメージを押し上げたい」と、角野社長は話す。

Go To Next!

D 触るの注意繊細さん を見に行く



プラモデル一つを形にするのでさえ、繊細な作業が必要です。失敗したり、小さなパーツを歪ませてしまった人も多いはず。プラスチックでできているものですら大変なのに、気温や湿度に左右されながら、金属や食べ物を扱うとなるとその作業はどれだけ大変になるのでしょうか。当たり前に日常で手にしているものも、そんな繊細な技術に支えられたりしています。

Let's Enjoy!

事務局メンバーからの

おすすめの楽しみ方

Ikuno Goto



後藤伊久乃

八尾市 魅力創造部
産業政策課 課長

周辺地域の推し

どこに行けばいいかわからなくなってしまったあなた。「もっと楽しみたい」という欲張りなあなたに朗報です。アリオ八尾2階に「OPEN FACTORY CITY YAO」というスペースがオープン。ここは八尾の製品や加工品などが集められ、触れることができる場所。八尾を知り尽くした産業政策課の職員も常駐してますよ。

Norihito Nomura



野村範仁

NxN Design
FactorISM 事務局長

推しのこうば

鉄、ステンレス、アルミなど生活に使われる金属の種類はたくさんある中、ダイヤモンドの次に硬い金属が「超硬」です。超硬は何かを略した言葉ではありません。その名の通り、極めて硬い金属。それをミクロン単位で扱う中村超硬さん（No.031）は驚きと新発見の連続です。普段の生活では絶対に見ることのできない繊細な世界をお楽しみに！

Takuji Hayashi



林卓司

京都信用金庫
八尾支店 支店長

楽しみ方の推し

よーく見ると先端が曲がった特殊な刃物を使い、圧巻の加工をしているのが昆布を生業にしている郷田商店さん（No.29）。堺は刃物の生産で有名な地域ですが、手すき昆布も有名なんです。でも、今では昆布を手加工する会社はわずか。郷田商店さんではそんな貴重な技と、日本の食文化を影で支える昆布の歴史や産地の特徴に出会うことができますよ。

D 触るの注意繊細さん を見に行く

開催地

北エリア　中エリア　南エリア

※イベント開催地は会社やこうばの所在地と異なる場合がございます。



No.026 株式会社和泉利器製作所



料理を愛し、料理を楽しむための道具づくり

創業はなんと文化二年（1805年）。鋤や鍬などの製造に始まり、堺の地で発展を遂げた鍛冶技術を活かして庖丁や鍋、料理ハサミなどの調理器具を製造。知識と実績を活かして提案やサポートを行い、使う人に合った庖丁を具現化することに心血を注ぐ。プロの料理人から、一般の家庭までが虜に。

大阪府堺市堺区九間町東1-1-5

No.027 浦田工芸株式会社（Iris ガラス工房）



作家とは違う職人としてのガラスづくり

1983年創業のガラス玉製造メーカー。現社長の祖父が戦後に始めた事業を引き継ぎ、ガラス玉や模造真珠を製造。2020年にガラス玉制作体験スペース「Irisガラス工房」をオープン。堺市に残る数少ないガラス玉のこうばとして、その火を消さないように職人たちの想いを継いでいる。

大阪府堺市南区稲葉2-3103-2

No.028 栄光技研株式会社



小さなバネと、知られざる企業努力

1977年創業のばね製造会社。カメラなどに使用される米粒大の極小バネの製造から始まり、今では農業機械、自動車部品、文房具用のバネを作っている。最近は旋盤やベンダー加工にも注力。2002年にISO9001取得、2008年に営業部を立ち上げ、営業するこうばとして進化中。

大阪府門真市三ツ島4-20-2

No.029 株式会社郷田商店



昆布一筋78年

1946年創業の昆布製品メーカー。手すきのおぼろ昆布やとろろ昆布、白板昆布などを製造。戦後から手作業で昆布を削り続け、最近では地元企業とコラボした「塩糀昆布」などにも挑戦。品質にこだわり、伝統技術の継承と若手職人の育成に努めている。

大阪府堺市堺区市之町東5-1-23

No.030 株式会社三和歯車



細かい工程の積み重ねが大切な歯車づくり

食品機械や鉄道など身近な製品の部品として使用されている歯車を、様々な材料を使用しオーダーメイドで作る。特にステンレス加工を得意としている。小さな歯車はもちろん、外径2メートルを超えるものまで手がけるが、このサイズの歯車の加工が可能な会社は全国でも珍しい。都島区の本社工場と、門真工場の2拠点がある。

大阪府大阪市都島区高倉町3-9-1
大阪府門真市四宮6-1-10

No.031 株式会社つぼ市製茶本舗



お茶は人と人をつなぐ

創業170年を超えFactorISMでも群を抜いて、その歴史が長い。名前の通り、製茶問屋としてお茶の製造から販売まで手がけている。日本茶だけでなく中国茶・紅茶・その他健康茶まで幅広く取り扱い、茶の湯文化が発展した大阪・堺のお茶屋さんとして、これからもいっぱいのお茶を通じて世の中の安らぎと和に貢献する。

大阪府堺市堺区九間町東1-1-2

No.032 株式会社中村超硬



職人技と最先端の研究開発の二刀流

焼結ダイヤモンドや超硬合金、セラミックスなどの超硬い材料への精密加工を軸とした創業70年の会社。2015年に東証マザーズ（現グロース）に上場。昔ながらの1ミクロンにこだわる「職人技」と産学連携による「最先端の研究開発」という二刀流でものづくりへの挑戦を続けている。

大阪府堺市西区鶴田町27-27

No.033 名張近鉄ガス株式会社



24時間365日、快適な暮らしのそばに

“近鉄エル・ピー・ガス株式会社”として、1961年に三重県の名張市で創業。44年無事故でガス供給を続ける総合エネルギー会社。都市ガスの製造を行い、24時間体制で安全を確保。古き良きガス会社として地域貢献と快適な暮らしを支えている。

三重県名張市八幡1232-1

No.034 株式会社福壽堂秀信

取材記事あり！（P.62へ）



「あ、好き」が聞こえる餡づくり

餡を作り続けて76年、自家製餡にこだわる和菓子屋。最高級の上生菓子に加え、粒餡やこし餡の良さを活かした伝統的な和菓子を中心に、ケーキやプリン、スポーツに最適な飲める羊羹といった時代に合わせた和菓子を開発。直営店や百貨店、茶寮、オンラインショップで全国の餡好きに届ける。

大阪府堺市堺区鉄炮町1-13

No.035 マルイチエクソム株式会社



一貫生産で製造・品質の管理を

国内最大のブロー成形メーカーの集積地である大阪で、50年ダイレクトブロー成形一筋に仕組みと体制を磨きあげてきた。ブロー成形とはボトルや筒状の中空成形品を作るための技術。現在は自動車部品、介護用品や医療ベッドなどのブロー成形を手がける。実習生や特定技能を含めて7カ国の従業員でチームを構成。

大阪府門真市ひえ島町17-30

E 変幻自在のバリエーション を見に行く



こうばの面白いところは、削ったり、切ったり、くっつけたり、混ぜたり様々な加工をすることで素材を別の形のものへと変化させていくことにあります。中には元の素材がなんなのか、まったくわからないようなものも。「これが本当に同じ素材でできているの?」という、驚きを見つけてみてください。

Let's Enjoy!

事務局メンバーからの

おすすめの楽しみ方

Takuji Hayashi



林卓司

京都信用金庫
八尾支店 支店長

周辺地域の推し

JR久宝寺駅から徒歩10分、近鉄久宝寺口駅からは徒歩15分程度のところにある「久宝寺寺内町」。水陸の交通の要衝として栄えたこの地域は歴史ある4つの寺社があり、今でも石畳みの路など風情あるまち並みが残ります。八尾の伝統産業である歯ブラシを製造する多葉刷子工業所さん(No.45)の訪問に合わせて、まちの散策をしてみてください。

Takuya Okazaki



岡崎拓也

大東市 産業・文化部
産業経済室

推しのこうば

布雑貨を型紙製作から生地の選定、裁断、縫製、包装など一貫して行っている企業が北次株式会社さんさん(No.41)です。建物は普通の家のように見えますが、一歩足を踏み入れるとたくさんの布製品が生み出されるこうばであることがわかります。一枚の布がいろいろな製品に姿を変えていく様子、リズム感のあるミシンの音が非常に心地良いです。

Yukihiro Mori



森雪尋

株式会社友安製作所
ソーシャルデザイン部
まちづくり事業／
ローカルプロデューサー
ディレクター

楽しみ方の推し

土木事業者の救世主、それがホーシンさん(No.51)!日頃から現場の声を大切にし、自分たちが使って便利なものをモットーに企画から設計・製造・販売・レンタル・メンテナンスまで一貫で行います。現場につきものの危険や自然変化によるトラブル、コスト管理などすべてを解決するアルミギア式サポート。あなたももう欲しくなったのでは?

E 変幻自在のバリエーション
を見に行く

開催地

北エリア　中エリア　南エリア

※イベント開催地は会社やこうばの所在地と異なる場合がございます。



No.036 株式会社アーテック



変化し続ける教育業界で挑戦を重ねる

創業64年の歴史と信頼を得る教育商材のリーディングカンパニー。主に工作キットや実験キット、粘土などを製造。教育環境の変化に対応し、デジタル教材やプログラミングロボットまでを開発している。子どもたちの知的好奇心をくすぐり、夢中にさせるための商品づくりに骨身を惜しまない。

大阪府八尾市北亀井町3-2-21

No.037 合同会社ウッディーズ



すべての人にオリジナル品を作るおもろさを

堺・和歌山を盛り上げるために2019年に創業された、次世代のプリント会社。会社の始まりは10年前に趣味で始めた服へのハンドプリント。今では衣類へのプリント技術は一通り揃えており、シルクスクリーン・インクジェット・転写・カッティングラバーに加え、デザイン刺繍・マーク刺繍・ネームタグの縫付の刺繍なども行う。

大阪府堺市堺区戎之町西1-1-8

No.038 角野晒染株式会社

取材記事あり！（P.40へ）



歴史ある堺の地場産業の守り手

堺の伝統「和晒」を使った手ぬぐいやホームウェア、アパレルの製造・販売を行う。和晒とは、手ぬぐいや浴衣のもとになる木綿生地から不純物を取り除き、漂白し柔らかい風合いに仕上げる技術。製造には時間がかかるものの吸水性・通気性に優れる。ロール捺染機やスクリーン捺染機で、染色やプリント工程も一貫して手がけている。

大阪府堺市西区津久野町3-32-1

No.039 株式会社河辺商会



見た目の美しさにも、プロセスにもこだわる

元々商社だった河辺商会は、プラスチック成形の魅力に取り憑かれ1961年から成形業をスタート。アッセンブリの工程をカットする「多色一体成形」や、成形時点で塗装後のような色艶を可能とする「無塗装成形」の技術を活かし、美しさと精度を兼ね備えた製造を行う。近年はまな板とお皿になる「CHOPLATE」を自社商品として開発。

大阪府堺市西区平岡町85-1

No.040 菊水テープ株式会社



言葉じゃ伝えられない技術とこだわりがある

普段多くの人が使うクラフトテープを量産し、世に広めた立役者。メーカーとして大切な「商品の品質安定と挑戦」を胸に掲げ、現場で積み上げてきた経験で豊富な商品を製造・販売。同時に、特定のニーズに合わせた少量生産にもしっかりと対応する高い技術力を持った総合粘着テープメーカー。

三重県名張市八幡1300-66

No.041 北次株式会社



大阪のおばちゃんが支える活気あるこうば

初代・北次長四郎が農業から縫製業に転身し、縫製業一筋で69年。バッグやポーチなどの服飾雑貨から医療介護用品まで多岐にわたる製品を手掛け、デザイン性や専門性の高いニッチな商品を作り続けている。OEMでの生産に加え、保育園の手提げかばんや上履き入れ、ワークエプロンなどオリジナル商品を自分たちで考えて制作。

大阪府門真市一番町15-7

No.042 株式会社小泉製作所



超難題もまずはやってみる

1933年創業、自転車用ハンドルの製造から事業をスタート。数多くのBMXメーカーのフレームやフロントフォークを作ってきた。今では高いパイプ加工技術で、産業用ヘリコプターやパワーアシストスーツ、近未来のコックピットやリハビリ用の歩行器も手がける。持ち前の挑戦心は“他社ではできない相談”が回ってくることで培われた。

大阪府堺市堺区鉄砲町18

No.043 シンコーエステック株式会社



自動車部品から知育玩具まで

1955年創業、八尾市にある金属加工会社。ラジオ部品製造から事業をスタートし、テレビ、家電、自動車の部品へと取り扱うものが拡大。今は電子部品から建築金物まで幅広く対応し、金型から組立までの一貫生産を行う。プラスチック、アルミ、銅、真鍮、ステンレス、鉄など多様な素材の加工ができ、異種材料への技術応用に強み。

大阪府八尾市竹渕2-140

No.044 有限会社大一創芸



もう一度考えたい心の豊かさ

結婚式やお悔やみ事に欠かせない、祝儀袋や熨斗袋を包む「ふくさ」を専門に企画・製造するメーカー。伝統を守りつつ現代に合ったデザインと機能性を追求している。こうばには人の気持ちに長年寄り添ってきた職人たちの、ミシンの音や生地を裁断する音、刺繍を施す音が聞こえてくる。

大阪府八尾市宮町4-3-30

No.045 株式会社高橋楠



堺打刃物の未来を切り拓く

包丁の柄付けと卸業を主に行う、1917年創業の会社。今年からは刃付けの内製化を進め、一貫生産体制へ移行している。自社ブランド「一刀斎虎徹」や「sen」は、国外でも展開され高い評価を得る。これまで分業制となっていた伝統的なあり方を見直しつつ、一からの職人育成にも力を入れている。

大阪府堺市堺区寺地町東2-1-17

E 変幻自在のバリエーション
を見に行く

開催地

北エリア　中エリア　南エリア

※イベント開催地は会社やこうばの所在地と異なる場合がございます。



No.046 有限会社多葉刷子工業所



山椒は小粒でもピリリと辛い

1949年創業の八尾の小さなまちこうば。女性従業員が90%を超えるのが特徴の一つ。特殊植毛技術に優れ、小型犬用天然毛歯ブラシ「MIGAKENDE」を販売。小ロット・多品種対応に強みがあり、新規開発案件のサンプル作成も引き受ける。

大阪府八尾市久宝寺4-2-38

No.047 株式会社友安製作所



ものづくりから、場づくりまで

1948年創業の友安製作所は、今でこそ多角的な事業を展開しているが、その核となっているのは鉄工と木工の技術。インテリアやDIYのオリジナルアイテムも、無骨さから繊細さまで、鉄の持つ豊かな表情を引き出す力で仕上げられている。自社工房でのデザインと製作に挑戦し、「家中丸ごと友安製作所の製品」を目指す。

大阪府八尾市神武町1-36

No.048 株式会社ナカニ



染め上がるまで、仕上がりが読めないどきどき

1966年創業の、堺の染め工場。注染やスクリーンプリント、ロール捺染を駆使しオーダーメイドの手ぬぐいを製造。染色工場としてスタートしたが、16年ほど前に立ち上げた自社ブランドをきっかけにデザイン・型作成・染色・販売までを一貫して行うように。

大阪府堺市中区毛穴町338-6

No.049 株式会社ニシカゼ



伝わりにくくても、こだわりを積み重ねる

1954年創業の革製品メーカー。学生鞄やビジネスバッグのOEMを経て、2011年にオリジナルブランド「duende」を立ち上げた。創業から継承してきた縫製技術を活かして、財布やインテリア、ペットグッズなど多彩な製品を作る。働いている人のアイデアや欲しいものを商品化しており、「ものづくり好きの集団」。

大阪府大阪市平野区長吉長原2-2-60

No.050 株式会社ニットープロセス



先代社長はお客さんの「駆け込み寺」

1978年創業の印刷加工会社。金属やプラスチック成形品に対してレーザーマーキング、パット印刷、シルクスクリーン印刷の3事業で加飾技術を提供している。自動車のエンブレムや輸出用バッテリーに刻印されている品番など、いつも何気なく目にしている必要不可欠な印刷を支える。

大阪府八尾市竹渕2-97

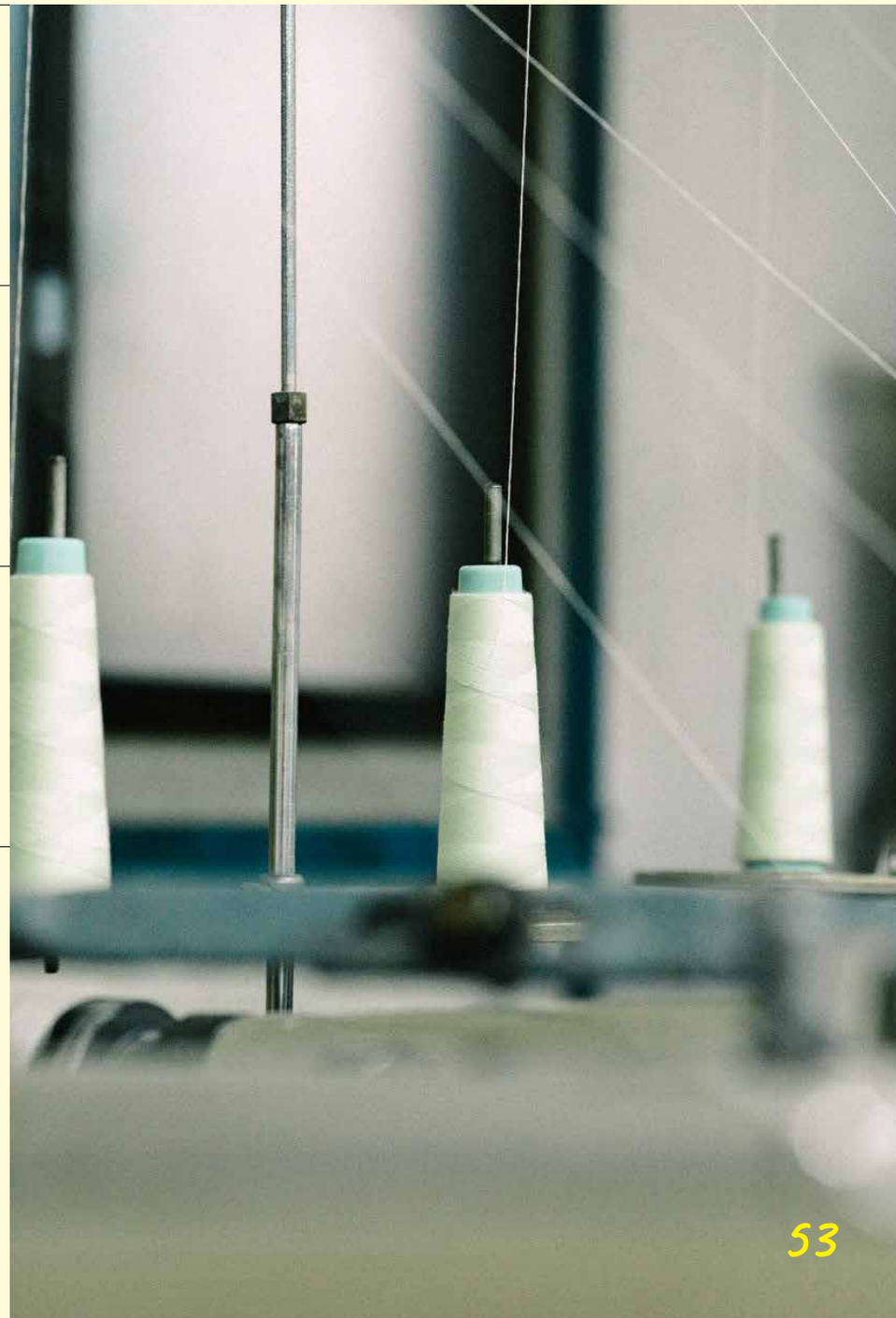
No.051 株式会社ホーシン



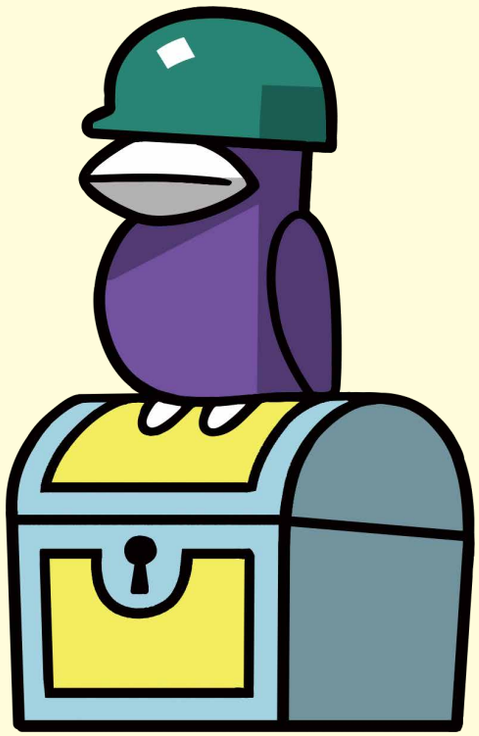
建設現場のあったらいいいなを製品化

1977年に創業された会社で、建設資材の企画から設計・製造・販売・レンタル・メンテナンスまでを行う開発メーカー。スーパーSSジャッキやアルウォーク、水抜きパイプなどが代表的な製品だが、今ではICT分野でのマシンのガイダンスシステムなども取り扱う。業種問わず、省力化の実現をサポートする。

大阪府門真市四宮3-10-34



F 世界にここだけ！希少なもの を見に行く



「希少なもの」と聞いて、どんなものを想像するでしょうか。ダイヤモンドみたいな宝石？ストラディバリウスのような技術の詰まった楽器？実は、大阪のこうばにも希少な技術や素材を駆使して作られているものがたくさんあります。そうした仕事は、名前を出せないようなことも多いもの。希少なものに触れられる、貴重な機会に飛び込んでみては。

Let's Enjoy!

事務局メンバーからの

おすすめの楽しみ方

Ryuji Fujita



藤田隆司

株式会社友安製作所
ソーシャルデザイン部
まちづくり事業

周辺地域の推し

「工場夜景」って聞いたことはありますか？堺と高石に隣接する阪神臨海工業地帯は、夜になるとまるでSF映画のワンシーンに。いろんな光で覆い尽くされるんです。山頂とはまた違った景色の夜景を見に騙された気持ちで行ってみてください！ドライブがてらにこうばを巡って、夜景を眺めて、こうば尽くしの一日もなんだかエンターテインメント。

Ikuno Goto



後藤伊久乃

八尾市 魅力創造部
産業政策課 課長

推しのこうば

塗装やメッキとは違う、金属感を残したままステンレス素材を唯一無二の黒色に変えるのがアベルさん（No.52）です。今回のFactorISMでは、竣工したばかりの新工場に入れると聞いて楽しみにしています。こうばに入ると、スカイツリーのエレベーターの中にいるかと錯覚するかも。とにかく、いろんなブラックに出会えます。

Masaki Terada



寺田昌樹

株式会社電通関西支社
プロデューサー

楽しみ方の推し

僕は木村石鹸（No.55）が好きです。「釜焚き製法」という伝統的な手法で作られた石鹸や、大企業ではできない自由な発想と製法で作られたくせ毛や傷んだ髪のためのヘアケア製品。そんな素敵な製品を考えて、作って、私たちに届けてくれる、木村石鹸の人たちが大好きです。そんな彼らに直接会える、FactorISMは貴重な機会ですよ。

F 世界にここだけ！希少なもの を見に行く

開催地

北エリア　中エリア　南エリア

※イベント開催地は会社やこうばの所在地と異なる場合がございます。



No.052 アベル株式会社



剥がれない、削れない黒い金属で一本勝負

1965年の創業からステンレスへの表面処理を生業に技術を磨いてきた。蓄積した技術と経験はステンレスの発色技術として高い評価を得ており、同社の名前を冠した「アベルブラック」は建築、光学機器、自動車など様々な業界で使われている。この技法は薬品の中に沈んだ製品に色が付いていたものを発見した、偶然から始まった。

大阪府八尾市南太子堂1-1-42

No.053 株式会社奥谷金網製作所



アナログ技術で世界トップレベルの製品を実現

1895年に創業。来年で130周年を迎える老舗金網メーカー。板厚より小孔径・小ピッチを可能にした「スーパーパンチング」、「超スーパーパンチング」が主力製品。素材や形状に応じて多種・多様な製品を製造ができ、環境・食品・農業・医療・科学・工場・AIR FLOW（空気流）等様々な分野で活躍中。

大阪府堺市美原区丹上460

No.054 柏原計器工業株式会社



水のあしたを、発明する

柏原計器工業は、水道メーターを製造・販売しているメーカー。特に製品開発に注力し、近年は次世代に対応したスマート水道メーターの開発を行う。研究開発・鋳造・NC旋盤・リユース・プラスティック射出成形などの専門工場を持ち、自社一貫生産体制によるものづくりを実現。

大阪府八尾市光町2-60 リノアス8F みせるばやお

No.055 木村石鹸工業株式会社



自分たちが欲しいと思えるものづくりを

1924年創業以来100年間、真面目に誠実にものづくり、ことづくりに向き合ってきた石けんメーカー。釜焚き製法により職人の手で石けんを製造。「非効率」とも言える技法だが、職人の経験と勘が大きなウェイトを占める自社の製造ノウハウとして大切にしている。家庭用から業務用まで多彩な商品を展開。

大阪府八尾市北亀井町2-1-30

No.056 錦城護謨株式会社



小さなゴム部品からインフラまで

1936年創業のゴム部品メーカー。自動車、家電、医療機器用などのあらゆるゴム部品を年間で数千種類をも製造する。土木事業や福祉関連事業も手がける。2020年にはオリジナルブランド「KINJO JAPAN」を立ち上げ、ガラスのような透明度を誇るシリコーンゴム製のグラスを開発。toCの事業にも踏み出した。

大阪府八尾市跡部北の町1-4-25

No.057 甲子化学工業株式会社



プラスチックの良さと悪さを受け止めながら

1969年に創業の東大阪にあるプラスチックメーカー。オフィス家具の部品やコンビニレジの外装などを製造。廃棄ホタテ貝殻を活用したヘルメット「ホタメット」など、環境配慮型素材を用いた商品開発も。パンデミックの時期には、大学と共同で20万個以上のフェイスシールドを全国の病院に寄付するなど、社会貢献への意識も高い。

大阪府東大阪市菱江2-5-14

No.058 シャープ化学工業株式会社



シンガポールを代表する観光名所にも使われる

建築物の気密性や防水性を高め、施工の際にできた隙間を埋めるコーキング剤を一日約2万本も国内外に送り出す専門メーカー。派生した商品を含めると防水材や接着剤、家庭で使えるものなど約100種類もの製品を企画・開発・製造。1960年に先代社長が自宅のガレージからスタートした会社が、今では国を超えて活躍。

大阪府堺市西区築港浜寺西町12-1

No.059 シルバー株式会社



人々の暮らしの豊かさに貢献する製品を生み出す

石油ファンヒーター用の「電磁ポンプ」の開発・製造を行っている会社。電磁ポンプは、銅線を巻いたコイル部品を中心に20以上の部品で構成され、灯油や油、水などの液体を電磁気学的な力で移送する製品。他にも温水洗浄便座や石油給湯器といった暮らしの中の様々なシーンを支えている。

大阪府八尾市北亀井町2-7-15

No.060 有限会社電研



作り手の次の手を生み出す

1960年創業。日本では唯一、化粧品などのアルミキャップをピカピカにするノンクロム電解研磨技術を持つ会社。電解研磨に必要な六価クロムが規制され、競合他社が化学研磨に方向転換を余儀なくされる中ノンクロムでの電気研磨を開発した。自転車・釣具・バイクのカスタムパーツからキャンプギアまで多彩な加工を行う。

大阪府大阪市生野区中川西3-5-17

No.061 堀田カーペット株式会社



日本にカーペットの文化を作る

イギリスの産業革命の頃が起源の「ウィルトン織機」と呼ばれる機械で製造するカーペットの製造会社。国内では約20台しか稼働していないうちの9台を保有し、50年ほど前に製造された機械をメンテナンスしながら大切に使っている。ウールを主材料にしたカーペットのみを作る。

大阪府和泉市観音寺町531

Episode

非合理が広げる可能性
産業機械の作り手に宿る信念

株式会社
ユタニ

自動車や冷蔵庫など、一つの機械製品を作るためには様々な機械設備が必要だ。つまり、こうばの中で使う機械を作る仕事も世の中にはある。そんな「こうばのためのこうば」である株式会社ユタニ（以下、ユタニ）は、こうばで使う機械を作る立場から、日本のものづくりを豊かで面白くするために日々奮闘する。

語り手
代表取締役社長／辰巳芳丈（たつみよしたけ）
資材部／森井啓太（もりいけいた）

こうばの設備も、どこかの誰かが作っている

一般的に、こうばで一つの製品を完成させるためにはいくつもの工程（製造ライン）が必要となる。自動車の製造で例えると、車体のフレームを作るライン、エンジンを作るラインなど、工程の数だけラインが必要となる。そして、一つの製造ラインですら素材を切る機械、穴を開ける機械など、必要な作業を自動化するための「産業機械」がいくつも組み合わされている。つまり、製造ラインとは「様々な作業を自動化する産業機械の集合体」。ユタニは、こうばの製造ラインの中で使われる産業機械を作る会社だ。

数ある産業機械メーカーの中で、ユタニが得意とするのは「コイルラインシステム」と呼ばれる分野。鉄の板を薄くのばしてロール状に巻いた「コイル」と呼ばれる素材を、作るものに合わせて加工する。

それ以外にも、ユタニではお客さんの要望に合わせて様々な種類の産業機械を作る。一つの製造ラインには、ユタニをはじめ多数のメーカーの産業機械が混在することも珍しくない。こうした話を聞いていると、私たちの生活がどれだけ多くのものづくりの担い手に支えられているかを実感する。

ユタニが作る機械は、全てオーダーメイド。機械の構造を設計する部署、電気回



路を設計する部署、設計内容に適した資材を調達する部署、出来上がった機械のパーツを組み立てる部署など、異なる知識と技術を持つスタッフたちの連携プレーによってワンストップで商品が生み出される。
取引先となるお客さんは、自動車メーカー、冷蔵庫メーカー、エアコンメーカーなど、様々だ。中にはチェコやスコットランドなど海外企業との取引もあり、世界レベルでお客さんの要求に応えられる力を持つことがわかる。「こうばの中に同じ機械が並ぶことはほとんどありません」と、辰巳社長。オーダーメイドの産業機械メーカーならではの風景だ。



全社員合わせて約50名ほどのユタニでは、各部門を少人数のスタッフで回している。「社員一人ひとりが自主的に働ける環境を作ることが、僕の役目です」と、辰巳社長は話す。

90点のその先を目指す

ユタニの仕事は、機械を納品してからが長い。メンテナンスや修理など、納品後のアフターサービスも大切な仕事の一つだからだ。経年劣化やユーザーの使い方などが原因でメンテナンスが必要になることもあるが、作り手側の問題で機械に綻びが出る場合もある。
「ボルトの締め方が少しでも甘いと、1、2年後にそのボルトは必ず緩んで落ちます。反対に、そうした細部の作業まで丁寧に行えば、20年、30年と長く使い続けられる機械になる。機械は必ず応えてくれるんです」
不便なく使える良い品質のものばかりに触れていると、機械が正しく動くことが当たり前だと思いがちだが、それは作り手たちの高い技術と丁寧な仕事があってこそ。無機質で頑丈そうに見える機械も、職人の手仕事から生まれる工芸品のような繊細さの上に成り立っている。ハッとさせられた瞬間だった。
辰巳社長は、「マニュアルでできるのは、90点の機械を作るところまで。残りの10点を埋める仕事はマニュアル化できません。そこをどれだけ埋められるかで、お客さんから選ばれるかどうかが決まると思います」とも話す。
お客さんの期待を越えるためには、カタログを用意して型にハマったものを提供するような仕事ではなく、「より良くしたい」という貪欲な姿勢と柔軟な対応力が求められるということだ。残りの10点を埋める姿勢はあらゆる仕事において大切なことだが、実践を続けるのは難しい。
そんなことを考えていると、「簡単にいかないところがものづくりの面白さです」と森井さん。昔から工作や機械いじりが好きだった森井さんは、ものづくりの現場で働きたくてユタニに転職したという。
「失敗する時には必ず理由があります。失敗した経験を糧にして、知識と技術を蓄積し、仕事に還元していく。そんなプロセスも含めて、ものづくりは楽しいです」



（左）ユタニの歴史は、鉄製の部品を削って加工する旋盤加工（せんばんかこう）の事業からスタートしている。現在も社内に加工部門を持ち、会社の強みにもなっている。（右）自社で作った機械だけでなく他社の機械と組み合わせることで、出来ることを広げていく展望も。お客さんへのプレゼンテーションの幅も広がるという。

残りの10点を追い求め続けていると、ユタニには発注の何年も前から相談がくるようになった。なんと、お客さんがこうばのための土地を探している段階から声がかかることもあるという。ただ、ユタニの80年以上になる会社の歴史では、土地を探す段階からの相談はおろか、話が来るのは決まって最後という時代もあった。
「求められる仕事のクオリティは年々上がっています。それだけ信頼してもらっているということなので、良い意味でのプレッシャーですね」
そう話す辰巳社長の笑顔の中には、会社がこれまでつないできたバトンを受け取り、また新たな歴史を作っていく覚悟と熱意を感じた。

非合理が生み出す価値を信じて

良いものづくりをするためには、良い職場環境が欠かせない。様々な部署のスタッフが力を合わせて一つの機械を作り上げるユタニでは、社内のコミュニケーションをとても大切にする。時間をかけてでも、仕事上の違和感を共有したり、製品をより良くするための議論をしたりと、一見すると回り道に見えることも疎かにしないよう意識しているという。
「効率やスピードだけを重視していても、良いものづくりはできません。非合理なことにも挑戦していきたいんです」と辰巳社長の言葉にも熱がこもる。
かつて、生産コストを下げるために同じ機械をたくさん作って販売する事業の方向性について議論をしたことがあったが、ユタニはその道には進まず、時間がかかってもお客さんの要望に合わせたオーダーメイドで仕事をする道を選んだ。
「カタログ化された製品をたくさん作って売る方が確かに効率的ですし、その方が良いとされる風潮も肌で感じています。しかし、『うちはこれしかできません』とすぐにラインを引いていては、新しいチャレンジをしたいお客さんの可能性をどんどん狭めてしまう。ちょっと手を伸ばせばできることに僕たち産業機械メーカーも挑戦していくことで、お客さんもできることが広がり、ひいては日本全体のものづくりがより豊かになるんじゃないかと思うんです」
そう話す辰巳社長の視点は、もはやユタニという会社単位の話ではない。その目線の先には、会社を超えて、大阪から日本、そしてその先に広がっているものづくりの世界が映し出されていた。



「最近の一番の設備投資は、土地を買ったことです」と辰巳社長。なんとこうばが1.5倍になるのだとか。お客さんの選択肢がより一層広がっていきそうだ。

Go To Next!

Episode

伝統の和菓子がエンターテインメントになる日を夢見て

株式会社

福壽堂秀信

株式会社福壽堂秀信（以下、福壽堂秀信）は、餡（あん）を炊き続けて75年以上の自家製餡にこだわる和菓子屋だ。歌舞伎や文楽などの伝統芸能が盛んなまちであった大阪・宗右衛門町で創業し、高級料亭に上生菓子を販売する事業をスタート。今では大切な人への贈答ギフトやお土産で大人気な百貨店ブランドにまで成長した福壽堂秀信のルーツを探る。

語り手
専務取締役／岡本將嗣（おかもとまさつぐ）
製造部 部長／岡野幸治（おかのこうじ）

餡は、和菓子の生命線

おいしい和菓子には、おいしい餡が欠かせない。福壽堂秀信では、職人が長年培ってきた自慢の技で3日間じっくり時間をかけて餡を炊き上げる。一方で、最近では製造にかかる時間や労力を削減するために、自社で餡を作らない和菓子屋も増えているという。餡は和菓子の生命線とも言えるからこそ、福壽堂秀信は自分たちで餡を作ることにこだわり、時代の変化に合わせた和菓子づくりを追い求め続けている。

餡と一言で言っても、最高級の生菓子である上生菓子をはじめ、粒餡やこし餡、和洋折衷のゼリーや羊羹に使用される餡など、様々な種類や用途がある。餡を作り続けて75年以上の福壽堂秀信では、長年の経験と培ってきた技術によって、炊き方や味付けの組み合わせを変えながら、それぞれの和菓子に合う餡を作る。これは、他社に簡単には真似できない福壽堂秀信ならではの技だ。

その上、餡づくりは季節や天候にも左右される。職人は五感を働かせ、水加減や炊き方を調整していく必要がある。高校を卒業してから30年以上に渡って福壽堂秀信の餡を作っている岡野製造部長は、「機械化が進むにつれて、作業効率や生産性が向上していますが、数値化できない職人ならではの手の感覚も欠かせません。



そこに、餡づくりの奥深さがあるんです」という。
機械もなかった時代から餡づくりに熱中し、その技を鍛錬し続けてきた岡野製造部長と、次世代の経営者である岡本専務が、今まさに世代交代に向けて歩みを進めている。伝統をつなぎ、新たな挑戦が生まれる企業文化を育てようとしているのだ。



職人の手の感覚を大切にしながら、一部の作業は機械化し、その分できた余白の時間は新しいチャレンジにあてる。温故知新の姿勢が現場にはあった。

会社の未来を、餡づくりとチームづくりから支える

1948年に大阪の宗右衛門町で創業した福壽堂秀信。当時はまだ商品への信頼や認知もない中、創業者の誠実な営業活動が実を結び、京都御所の宮内庁に和菓子を献上するところまで辿り着いたという。その後も関係性ができた取引先と意見を交換しながら成長し、事業が拡大していく中で、福壽堂秀信は帝塚山にこうばと販売の機能を持った建物を建設した。帝塚山は高級住宅が多く集まるまち。たまたま百貨店のバイヤーの目に留まったことをきっかけに、今ではブランドとしての信頼を勝ち取ることができた。
そんな話を聞くと順風満帆な経営に聞こえるが、「バブル崩壊後は大変だったと聞きます」と、岡本専務。不景気な時代に突入する中、料亭からの注文や売上の柱であった婚礼ギフトとしての注文が減少し、洋菓子の台頭も相まってお客さんのニーズが変化。主な取引先であった百貨店からの要望に苦労しながらも応えていく中で、会社はまた一歩成長したという。
情熱的でエネルギッシュな企業文化を創業者から受け継いだ岡野製造部長をはじめ、当時の営業本部長が商品開発に力を入れたり、事業計画を練りに練り直したりしたことで、そんな大変な時期を乗り越えた。福壽堂秀信の人気商品である一口羊羹シリーズの一つ「季乃實 栗(ときのみのり・くり)」はその時に生まれ、会社を立て直すために一役買ったという。
会社の苦しい時代も楽しい時代も知る岡野製造部長と岡本専務は、次の世代に伝統の味と想いをつなぐため、それぞれの立場から企業文化づくりに取り組む。岡本専務は、若い社員がワクワクしながら新しいことに挑戦できる環境づくりを通じて、個人とチームの両方が学び続ける組織づくりに取り組む。
その一方で、岡野製造部長は餡の味をつないでいくために「基本のキ」を伝えることを大切にする。一つひとつの工程をマスターしたその先に、商品開発などいろ



(左)小豆が育つ畑では、虫や雑草など自然との戦いも。「農業体験を通じて農家さんの苦労を体感し、その上で商品の価値を伝えることが大切だと思います」と岡本専務は話す。(右)「商品企画では、いろんな材料を組み合わせる想像をして、まず頭の中で食べてみます。実際に商品化が決まる瞬間はやはり嬉しいですね」と、岡野製造部長。

んなことに興味を持ち、働く目標を作ってほしいと願っているという。「現会長に言われた『餡だけはちゃんとせい』という言葉は今も胸に刻んでいます」と、岡野製造部長。基本を守りながら未来に福壽堂秀信の味をつなぐため、二人は役割こそ違えど、そこにかける想いは一つだ。

和菓子づくりをエンターテインメントに

創業76年の福壽堂秀信は、今どんな未来を描いているのだろうか。伺ってみると「和菓子をエンターテインメントにしたい」と、岡本専務は語る。一体どういうことなのだろうか。
「宗右衛門町には年々海外からの観光客も増えていて、時代とともに地域が変化しています。お中元やお歳暮など、ギフトとして和菓子を買っていただく文化ももちろん大切にしたいですが、普段は食べられない出来立ての和菓子を食べてもらったり、職人が和菓子を作る様子をパフォーマンスとして届けたりするなど、今後は和菓子をエンターテインメントのように楽しめる体験も届けたいんです」
そう話す岡本専務の目線の先に描かれていたのは、和菓子を起点に宗右衛門町がエンターテインメントのまちになった未来であった。
もちろん、和菓子づくりの面白さを消費者に伝えることだけが目指すべき姿ではない。食品を加工する福壽堂秀信にとって、小豆をはじめとする自然素材を提供してくれる生産者も大事な存在だ。岡本専務と岡野製造部長は生産現場に実際に足を運び、農業体験をする活動も積極的に行っている。
「小豆の苗を先日200本ほど植えてきたんですけど、もう本当に暑くて過酷で。農家さんってこんなに大変なんだと感じました」と、岡本専務はその時のことを振り返る。生産者の苦労や丁寧な仕事ぶりを肌身で実感しているからこそ、和菓子づくりを支えてくれている農家さんへの感謝も忘れないのだ。
社会の変化に合わせて柔軟な発想で和菓子を届ける一方で、伝統や「基本のキ」にはあくまで忠実に。そんな姿勢の中に、和菓子の基本であり生命線となる餡づくりにこだわり続けてきた福壽堂秀信の心意気を垣間見た。和菓子をきっかけに、宗右衛門町がエンターテインメントのまちになる未来は、そう遠くないかもしれない。



FactorISMへの参加は今年が3回目。「お客さんの『すごい!』や『おいしい!』の声で、作り手たちがすごく良い表情をするんです」と、岡本専務はにこやかに話す。

Go To Next!

G 縁の下の力持ち

を見に行く



生活に必要な身近なものを作っている会社はその必要性を想像しやすいですが、そうしたものづくりの現場を支える機械そのものや、試作品を作ることも「なくてはならない仕事」です。褒められる機会が少なくて、むくれているんじゃないかって?そんなことはありません。いつも、やりがいと日本のものづくりを支えているという自負を胸にこうばで仕事に励んでいます。

Let's Enjoy!

事務局メンバーからの

おすすめの楽しみ方

Takuya Okazaki



岡崎拓也

大東市 産業・文化部
産業経済室

周辺地域の推し

京セラ、パナソニックのもと栄えた北エリアの大東市と門真市。こうばは両市に跨がり密集しているため一度に効率よく回れます。近くには鶴見緑地や深北緑地といった広大な緑地公園やららぽーと門真もあり、産業エリアと緑豊かな雰囲気、お買い物を一度に楽しむこともできます。

Ryuji Fujita



藤田隆司

株式会社友安製作所
ソーシャルデザイン部
まちづくり事業

推しのこうば

果物への愛が詰まったジャムづくりをしている千総さん(No.71)にずっと行きたい!去年のFactorISMの写真を見ていても、こうばが果物の匂いで充満していることが伝わります。出来立てのジャムをその場で食べたり、オリジナルラベルを貼って持ち帰るのも楽しそう。普段、塗りたくっているジャムからの鞍替えも遠い日ではないかも!

Sayuri Takashima



髙島小百合

株式会社タカヨシジャパン
代表取締役

楽しみ方の推し

「なにか面白いことをやりたい!」と近鉄八尾駅周辺の企業8社が集まったその名も「八尾北連合」。所属している企業はみんな製造業だけど、それぞれ作っているものが違う。その技術と知恵と個性を出し合ってできたのが「巨大!スマートボール!」。畳1畳ぐらいの大きさがあります。FactorISM開催期間中もどこかに出没予定です!

G 縁の下の力持ち を見に行く

開催地

北エリア　中エリア　南エリア

※イベント開催地は会社やこうばの所在地と異なる場合がございます。



No.062 株式会社青戸金属



金属と会話する技術「へら絞り」のプロ

金属加工の中でもたわみや破断が発生しやすく、難易度が高い金属のへら絞り加工を得意とする。現在はデジタル技術を搭載した最新の設備で、鉄、ステンレス、アルミ、真鍮製品を加工。技術力を活かして、インテリアや、環境機器、粉体機器からアウトドア製品のコップやトレイなど、幅広い商品の試作品や量産品の生産に応えている。

大阪府八尾市宮町6-2-12

No.063 有限会社岩崎電装



故障で動かなくなったものを生き返らせる

自動車のスターターモーターやオルタネーターのリビルトを専門に行う会社。リビルトとは、故障した部品を分解・洗浄・修理し、新品と同等の性能を持たせる再生作業のこと。特にトラックや建設機械の部品を再生し、環境への配慮とコスト削減に貢献している。岩崎電装のリビルトを行える一人前の職人になるには通常10年かかる。

大阪府門真市四宮5-2-21

No.064 株式会社エムズコーポレーション



企業が社運をかけて行う、秘密を担う

業種を問わず新製品の試作品を作る会社。家電や車、バイク、自転車、文房具、スマートフォンなど手がける商品は多岐に渡るが、社外秘としてプロジェクトを表に出せないことが多い。創業当時は工場レスでスタート。2022年に本社を大阪府四條畷市に移転し、現在は社員も47名に。

大阪府四條畷市西中野2-8-3

No.065 株式会社オーツー



空間やニーズに合わせて理想の一脚を

スチールファニチャーの製造を得意とし、商業施設やオフィス、店舗のイスやテーブルの製造・販売を手がける。ホーム家具とは異なり、幅広い使用者を想定した高い強度と多様な空間へ合わせるデザインが肝。創業50周年のタイミングで自社ブランドを「QUON」を発表し、イメージを一新。近年はオフィスをショールームとして活用。

大阪府八尾市楠根町2-1-1

No.066 カネエム工業株式会社



身近な商品を通して、パーツの未来を作る

主にアパレルで用いられるハトメ、リベット、ジーンズボタン等の金属パーツを製造する会社。金属プレス加工をベースにものづくりをしているが、アパレルの世界で培った多彩な表面処理加工や組み立て加工も行えることが強み。微細な凹凸デザインや風合いのある色目など、小さな商品の奥に広がる深い世界を探求している。

大阪府八尾市泉町1-93

No.067 株式会社河内鉄工所

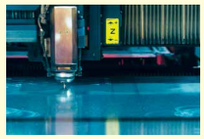


加工技術と品質管理で有名メーカーと取り引き

1949年創業、オートバイの部品製造に始まった金属加工会社。老舗家具メーカーとの仕事がきっかけで家具製造の土台ができた。今では高機能なチェアやデスクの主要部品など、試作品から量産品まで精度の高い製品づくりを行う。パイプ加工、プレス、ベンダー、溶接の主要技術に加え、銅板、アルミ、木材のレーザー加工が得意。

大阪府堺市堺区北庄町3-1-17

No.068 株式会社広伸



時代の変化に合わせて製造のやり方を更新

1970年創業の門真のものづくり企業。プレス加工や溶接組立を主力に、住宅用金物や特殊車両部品、産業用機械部品などを製造している。全自動レーザー加工機と協働ロボットを導入し、多品種小ロット生産に対応。総合力を武器に、想いを形にするべく奮闘中。

大阪府門真市四宮4-5-22

No.069 コンペイトウミュージアム堺（大阪糖菓株式会社）



おいしい!面白い!まずっ!きれい!かわいい!

菓子問屋として創業し、1946年より金平糖などの砂糖菓子の製造を開始。ユニークでオリジナルをモットーに、良質なグラニュー糖で宝石のようなキラッと輝く透明感ある金平糖づくりを目指す。製造にはなんと2週間かかるとか。近年はオリジナルのゆるキャラや漫画を通じて、金平糖の素晴らしさを伝えることに尽力。

大阪府堺市堺区南島町4-148-12

No.070 株式会社三栄金属製作所



事業を引き継ぎ、国内外の人材を活かす

創業した1970年は小さなプレス機での加工が主な仕事だったが、現在は生野区を拠点に10か所のこうばを展開。金型設計から樹脂成型、研磨加工、組立までの一貫生産を行い、水まわりの部品や化粧品ボトルのアルミキャップを製造。2007年からベトナム人実習生を積極歴に雇用。また、廃業会社の事業を引継ぎ大きく成長した。

大阪府大阪市生野区中川東1-8-19

No.071 有限会社千総



四代にわたりフルーツと向き合う

明治20年創業。約20年前に果物の小売店からジャムの製造販売に事業転換をした。添加物不使用のジャム製造を行い、アパレルブランドが展開するグローサリー部門のジャムなど、OEMも多数手がける。2023年にカフェ併設工場を新築。カフェでは、ジャムを練り込んだジェラートを提供している。

大阪府堺市美原区黒山463-1

G 縁の下の力持ち を見に行く

開催地

北エリア　中エリア　南エリア

※イベント開催地は会社やこうばの所在地と異なる場合がございます。



No.072 大日運輸株式会社



超速のありがとう創造企業

1971年創業。主に住宅用外壁材のコーナー材を製造し、寸法に合わせた加工を強みとする。木造住宅の約8割に使用される外壁材のコーナー材は、各々の住宅のサイズに合わせた“ピッタリ”コーナー材を使用することで、より「キレイな壁」が実現。ビジネスモデルが評価され、中小企業白書2020に掲載された。

大阪府門真市島頭3-7-3

No.073 大和板紙株式会社



作り手に寄り添う製紙会社

主にお菓子のパッケージや本の表紙に使われる厚紙を作る。50年以上、古紙回収の受け入れ工場、国や官公庁の機密文書類の大量処分、飲料容器のパッケージ処分など、様々な再生紙製造を請け負ってきた。表裏の色が違う板紙、芝や木の樹皮を混ぜ込んだ板紙など、約70種類の板紙の一つひとつに制作に至るストーリーが。

大阪府柏原市河原町5-23

No.074 谷元フスマ工飾株式会社



100年使う、ふすまに付き合う

1946年創業、住空間の間仕切りを専門に企画・製造・施工を行う。今では、ふすまに加えて障子やドア、クローゼット、パーテーションなども取り扱うものの、大切にしているのは日本の伝統的な暮らしに根付く和の魅力を再発見すること。職人技が引き継がれ、時代の変化でどのように変化しているのかが垣間見える。

大阪府八尾市宮町4-1-15

No.075 常磐精工株式会社



日本で一番、看板を作っている会社

ベアリング切削のまちこうばとしてスタートし、リーマンショックをきっかけにタープの自立式の脚部を作るように。特許を取得したことで花を飾る台や看板など棒状の物を自立させる商品を作ることが増え、サインディスプレイ業界に参入。現在は店舗やイベント会場に設置する「スタンド看板」を多く手がける。社員の平均年齢が約28歳。

大阪府堺市北区常磐町3-19-3

No.076 株式会社平井製作所



金属板を切り、絞り、曲げて立体的な形に

1934年創業の金属のプレス加工を技術の核とする会社。金型設計からプレス加工・溶接・塗装・メッキ・組立・最終梱包までの一貫生産を協力会社と行い、主に建築・電設向けの金属部品やユニット品を製造している。コロナによるパンデミックを契機に食品事業部も立ち上げ、今ではぽん酢や水産物加工品なども製造販売している。

大阪府八尾市竹渕3-137

No.077 フコク産業株式会社



試行錯誤を経て製品ができる瞬間がワクワク

1972年創業。自動車用のシール部品、給湯器用ゴム部品など工業用ゴム製品やシリコン製品を主に製造してきたゴムメーカー。少ロットや短納期に対応し、顧客のニーズに柔軟に応える姿勢が特徴で、自社商品としてシリコン製の蓄光・抗ウイルスのドアノブカバーなども販売。2022年に3代目社長が就任し、新しい商品開発に挑戦中。

大阪府八尾市神武町1-81

No.078 松村釦株式会社



変幻自在なポリボタン使い

ポリエステル樹脂ボタンに特化したボタンメーカー。1949年の創業以来、“Made in JAPAN”の高い技術と品質にこだわり、ユニフォームから国内外の有名ファッションブランドに製品を提供してきた。液状の樹脂の配合からボタンの形になるまで一貫した製造を行っている。またデザインの幅が広く、その表現力の幅が見どころ。

大阪府柏原市高井田535

No.079 株式会社明和食品



モーツァルトが流れる食品メーカー

1973年創業の食品メーカー。喫茶店等に向け「焼肉定食」を製造・販売していたが、今では全国の飲食店・ホテルをはじめ、百貨店への販売や自社通販を展開。20年ほど前に始めた無添加の食品づくり以降は売りやすさより「体に優しい」「自然においしい」を大切にしている。一番人気のハンバーグは年間出荷数250万個を突破。

大阪府堺市北区野遠町9-9

No.080 株式会社ヤマトステンレス



0.3~0.5ミリの薄い肉のパイプ加工

1981年創業のステンレスパイプ製造メーカー。主にガス給湯器用の給排気筒（煙突部分）を製造している。もともと別の会社に勤めていた会社が倒産した際に集まった職人が集まってできた会社で、技術を特化させることで成長してきた。造管から加工、検査までを一貫して生産。

大阪府堺市中区新家町624

No.081 吉川鐵工株式会社



人・もの・ことをつなぐ技術を提供する

65年の歴史を持つカシメ機の設計・製造を行う会社。カシメはものとものを接合する為の加工技術で、身近なものではハサミやフライパン、キャンプ用品等広く使われる技術。昔はハンマーによる人の手で行い、大変な重労働であったことから機械メーカーへ転身し、累計で1万社以上、3万種以上のカシメ加工を支援してきた。

大阪府四條畷市蔀屋新町3-7

H この人の熱にあてられて を見に行く



「こうば」を楽しむ第一の目的は貴重な技術や素材かもしれません。でもやっぱりそこにいる人がものを作っていることは忘れてはいけないこと。大阪のこうばで働く人はみんなものづくりに対して熱い情熱を燃やしている人たちばかりですが、その中でもよりすぐりのあちあちをご紹介します。こうばが熱いのは、設備のせいだけではないのです。

Let's Enjoy!

事務局メンバーからの

おすすめの楽しみ方

Yukihiro Mori



森雪尋

株式会社友安製作所
ソーシャルデザイン部
まちづくり事業／
ローカルプロデューサー
ディレクター

周辺地域の推し

腹ごしらえには「三ツ島 真打」さんでしょ！地域の方はもちろん全国各地のうどん好きが集まる名店なんです。麺は圧力鍋で茹でられたうどんのコシと、もっちもちの食感。食べた瞬間思わずニヤけてしまうこと間違いないです。メニューはカレーうどん、熱いうどん、釜炊きの3種種。トッピングやご飯も充実しています。あなたなら何を食べますか？

Yasuki Matsuo



松尾泰貴

株式会社友安製作所
ソーシャルデザイン部 執行役員／
FactorISM 統括プロデューサー

推しのこうば

毎日、その日の気候やごまのコンディションに合わせて煎り方を調整する和田萬さん（No.91）。できあがってくる商品は、食材の良さをグッと引き立たせてくれる名脇役。輸入に頼る日本の食料事情を憂いて国産ごまを作るプロジェクトを立ち上げたり、カフェ「IRUAERU」ごまを使った料理教室を行ったり、ごまを通じて行う様々な展開に脱帽です！

Norihito Nomura



野村範仁

NxN Design 代表
FactorISM 事務局長

楽しみ方の推し

炎は赤より青い方がはるかに温度が高く、熱い。そんな青い炎を宿し600年もの歴史あるものづくりを継承してきたのが馬場刃物製作所さん（No.87）。培ってきた変わらぬ伝統を大切に、時代の変化に合わせてどうやって変わっていけばいいのか。そんな悩みを抱えている人は、馬場刃物が継いできた熱い想いに触れると勇気をもらえるかもしれません。

H この人の熱にあてられて を見に行く

開催地

北エリア　中エリア　南エリア

※イベント開催地は会社やこうばの所在地と異なる場合がございます。



No.082 株式会社旭食品

取材記事あり！（P.80へ）



これぞ大阪の味

76年の歴史を持つ食品会社で、大阪で愛される「旭ポンズ」を中心に製造。天然原料にこだわり、初代が開発したレシピで変わらぬ味を守り続けてきた。主力商品は旭ポンズ、旭ぶっかけポンズ、うどんだしの素、そばつゆの素の4つ。昆布や節から抽出した出汁と、徳島県産の柑橘果汁を使用されたポン酢は絶品。

大阪府八尾市太子堂5-1-46

No.083 株式株式一瀬製作所



2度の得意先の倒産時に、機械と人材を引き継ぐ

創業1975年、ステンレスサッシを数多く手がける金属加工メーカー。建物の玄関周りや壁パネル、庇などの一品一葉図面の製品を一貫生産している。「ええもん作ろう！」を合言葉に「日々技術を磨く職人集団！」を目指す。現在、日本一の高さのビル「麻布台ヒルズ」の1F玄関周りのドアも一瀬製作所が手掛けたもの。

大阪府門真市四宮6-2-23

No.084 大阪糖菓株式会社



おいしいの先、ユニークでオリジナルがモットー

現在日本で金平糖を製造するこうばは9社のみ。その中でも西日本で最大の出荷量を誇り、製造釜の台数は16台。ユニークな商品開発にも力をいれており、直径1ミリの世界最小の金平糖や、塩を使った塩こんぺい、織田信長が食べたであろう金平糖の復刻などに取り組む。直径1メートル80センチの巨大な釜が回転する様は圧巻。

大阪府八尾市若林町2-88

No.085 株式会社浪速工作所

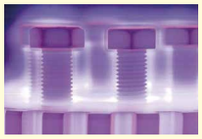


金型づくりだけでなく、自社の製品づくりも

1946年創業。主にプラスチック製品の金型や金属設備を作り、「水」や「環境」を事業にしている大手企業の課題解決に貢献。製品は社内で一貫して製造されており、これまでに3000種以上の金型開発経験を持つ。近年は、中小企業の抱える社会課題を解決する製品の開発をスタートし、「小さな缶詰厨房」などを提案中。

大阪府堺市南区高尾3-3287-2

No.086 八田工業株式会社



預かった製品に熱で命を吹き込む

1979年創業。堺の金属熱処理加工会社。真空熱処理やイオン窒化処理を専門とし、ステンレスやその他金属材料の精密な熱処理を行う。高温から極低温までの熱処理を操り、様々な金属に力を与えることが可能。こうばの中は熱く、また中の人たちも熱い。

大阪府堺市中区八田西町2-18-40

No.087 株式会社馬場刃物製作所



ものづくりは地道に技術を積み重ねていく精神

1916年に初代「馬場一治」が鍛冶屋として創業。職人が手づくりした鋼包丁をメインに、家庭用から、プロの料理人用まで多種多様な刃物を製造・販売している。10年ほど前までは製造問屋として事業を行ってきたが、職人の高齢化・作り手の減少を鑑みて、自社で「刃付工房」を立ち上げ若手職人の育成に力を入れている。

大阪府堺市堺区宿屋町東3-3-22

No.088 藤田金属株式会社



「なんでもやったるで」精神でアイデアを形に

1951年に創業した八尾の金属製品メーカー。フライパンや鍋、ヤカンなどの製造を手がけ、職人の技術と創意工夫を駆使した日常を楽しくする道具づくりに勤しむ。鉄製のフライパン製造に特化し、軽量化や焼き付けなどの技術で使いやすさを追求。近年はカスタマイズできる「フライパン物語」や、「フライパンジュウ」が好評を博す。

大阪府八尾市西弓削3-8

No.089 株式会社山田製作所



こうばの工場に部品を提供するこうば

金属プレス加工業で1959年に創業。幅広い材料での板金・製缶加工・機械加工を手がける。産業用機械メーカーや製品製造メーカーから依頼を受け、それらの部品や装置を作る。スマートフォンの液晶画面に貼られる光学フィルムや、リチウムイオン電池の電極を作る装置、祇園祭で使われる階段など大きな設備から小さな部品まで。

大阪府大東市新田中町2-41

No.090 有限会社ワコーメタル



変化を楽しむ製造業を目指す

2000年に創業。大手企業を取引先としながら、板金加工を通じて制御盤などの製作を行う。また摂津市地域を中心に定期的なイベントを実施。インターンシッププログラムを導入し、同志社大学の学生との共同開発や追手門学院大学との産学連携による授業提供など、板金加工にとどまらない幅広い活動にも取り組む。

大阪府摂津市鳥飼本町2-12-32

No.091 株式会社和田萬



世界中に本当のおいしさを届ける

1883年創業、140年の歴史を持つごまのこだわりメーカー。国産ごまの取り扱いシェアは日本一で、100種類以上のごま商品を取り扱う。ごまの風味を決めるのは原料が3割、焙煎が7割。そのため、こうばでは熟練の職人たちが常に味を確認し、時間や温度を調整しながら自家焙煎だからこそできる豊かな香りと奥深い味わいを追求している。

大阪府八尾市老原7-97

Episode

堺の小さなまちこうばが鋳造で社会を支える会社になるまで

株式会社
ヤナギモト

金属を溶かして液体にした後、型に流し込み冷やすことで様々な形状に固める加工法を鋳造（ちゅうぞう）という。創業から四代に渡り、鋳造技術によって社会のインフラに不可欠な製品を世に送り続けてきた株式会社ヤナギモト（以下、ヤナギモト）。ものづくりに新たな価値を吹き込んできたヤナギモトの歴史と、今後の展望に迫る。

語り手
代表取締役／柳本喜満（やなぎもとよしみつ）
製造部 生産管理課／武田源太（たけだげんた）

業界は担い手不足、それでも進化を続ける

鋳造業界は、他の製造業と同じく国内での担い手が少なくなっている。これまでは海外からの技能実習生が日本に来て働くことも多かったが、中国やインドなど海外でも日本と同じレベルの製造ができる環境が整ってきたという。加えて、昨今の円安の影響もあってわざわざ日本に来て働く人は少なくなった。高温の環境での作業が求められる鋳造の仕事は、「3K（きつい・汚い・危険）」と呼ばれることもあり、ただでさえ担い手を見つけるのは簡単ではない。

そんな業界であるにも関わらず、ヤナギモトの現場には活気がある。こうばには80人を超える従業員が働いており、若手の作業員も多い。彼らが特に力を入れて作っているのは「3Dインペラ」と呼ばれる製品。インペラとは、ポンプで液体を吸い上げたり送ったりするために必要な部品の一つだ。羽根車で液体を回転させることで遠心力を与え、ポンプ内部の液体を自在に動かす。

この3Dインペラは、長い時間をかけて職人たちの技術によって築き上げられた、ヤナギモトの看板製品だ。複雑な形状の3Dインペラは、多くの専門家が高い関心を持つほど競争力の高い製品として評価され、同業者でも「こんなの作れない」と諦めてしまうほど。ここまでくると、もはや作品に近いのかもしれない。これらは



年間2万点以上が日本の主要ポンプメーカーで使用されており、私たちの生活を目に見えないところで支えてくれている。



鋳造では、溶かした金属を流し込む木型の設計・製造のほか、鋳造時に発生する「巣」と呼ばれる穴の溶接補修や検査など、前後に様々な工程が必要になる。これらをワンストップで担える点もヤナギモトの強みだ。

会社を変えたのは、地道な挑戦の積み重ね

ヤナギモトは「柳本合金鋳造所」として、柳本社長のお爺さんにあたる柳本喜晴さんによって創業された。当時は、大阪府堺市に拠点を構えていたという。戦後、日本でポンプを製造する大手企業との人脈があったことがきっかけとなり、ブロンズ（銅）の鋳造を開始。10人に満たない規模でスタートしたヤナギモトでは、朝早くから鋳込み（いこみ）の作業を行い、当時は日中はお酒を飲みながら製造を行うなんて日もしばしば。時代の変化に伴って、こうばの音や匂い、煙などに対するクレームが近隣から入ることもあり、こうばの玄関を締め切って作業していた時期もあった。「天井が低くて室内が暗いこうばの中で、仕事があればそれでいいと思って働いていた時代です。決して革新的な会社ではなかったですね」と、柳本社長は当時を振り返る。

その後、2006年に現本社のある大阪府高石市に移転。大手企業との取引も増え始めた当時、「これからは鋳造だけでなく、製品の加工まで担える企業になることが必要ではないか？」と、柳本社長のもとに機械商社で働く友人から声がかかった。半信半疑で金属の加工機械を導入した結果、その投資が会社の事業の幅を広げることになり、仕事だけでなく社員も増えるきっかけの一つになった。

他にも、ヤナギモトにはある大きな転機があった。それは、ポンプ業界ではブロンズを使用するのが主流であったが、ステンレスの鋳造に着手したこと。ポンプの部品がブロンズからステンレスに代わりつつあった中で、ヤナギモトではステンレス用の鋳造炉を導入。当時、会社の規模も大きくない中での投資は大きな冒険だったという。しかし、この投資が転機となりステンレス鋳造の仕事が増加し、今では仕事の8割以上を占めるまでになった。





（左）こうばには3Dプリンタなどの最新機器も。柳本社長は「新しいことにトライできる環境を作ることで、スタッフの知識欲も刺激できる会社でありたいです」と、社員の働きがいも忘れない。（右）ヤナギモトには、日本人だけでなくベトナム人のスタッフも。円安の影響で日本での求人が難しくなっていることを踏まえ、いずれは海外にこうばを建てる展望もあるという。

さらに、一般的に製品の重さが価格を決める鋳物業界では、ヤナギモトが得意とするインペラのように、複雑な形状かつ内部に空洞ができるような製品はその分だけ重量が減って価格に影響するため、参入する業者が少ない。「他社が手を出さない領域にあえて取り組み続けてきたので、うちなら丁寧かつ品質の高い製品を作ることができます」と柳本社長はサラッと話すが、「言うは易く行うは難し」だ。他社が挑戦しない領域を開拓し、自社の強みにするまでには、私たちの想像を超えるような努力があったのだろう。

会社や国をこえて、その価値を伝えていくために

ヤナギモトには、「どんなに忙しくても、どんなに難しくても、声をかけてもらった仕事はすべて引き受ける」という、創業時から受け継がれてきた精神がある。これは、3Dインペラの製造難易度が高くヤナギモト以外の引き受け先がないという事情と、社会インフラの維持に携わる企業としての責任から、代々守り継がれてきた仕事への向き合い方だ。

「社会インフラに携わる若い担い手を発掘し、ヤナギモトの精神を継いでいきたい」と、柳本社長は未来を見据える。そんな大きなミッションを前に「ヤナギモトの会社の価値を、社外の人だけではなく、社内の現場で働いている人たちにも伝えていきたい」と、武田さんも言葉に熱が入る。別の鋳造会社で働いた経験もある武田さんは、様々な企業が参加する展示会で、ヤナギモトの3Dインペラが同業者から高い関心を集めていたことが印象的だったという。

2024年の秋には、本社の敷地内に新工場も完成予定だ。FactorISMで見学した他社から様々な気づきを得られ、いろいろな構想が頭の中にあるという。中でも大きな構想の一つが、海外進出。過去に、ドイツで行われた海外展示会でもヤナギモトのインペラは高く評価されたことから、ドイツをはじめとするヨーロッパやアメリカなど、海外にも自社の製品を売り込んでいきたいとのことだ。「ついでに海外旅行もできると期待して」と、柳本社長と武田さんは笑いながら未来を語り合う。社会インフラを支えるヤナギモトの挑戦は、今海の外にもその視線が注がれている。



「次の価値を鋳込む。」というビジョンの裏には、3Kの仕事と言われる一方で社会インフラに携わる重要な仕事であることを、社員にも認識してほしい柳本社長の想いがあった。

Go To Next!

Episode

守り抜いた伝統の味と、変わりゆく社会のあいだで

株式会社
旭食品

会社で代々受け継がれてきた伝統と、毎日変化していく社会のあいだで、どう折り合いをつけて事業を育てるか。これは、あらゆる会社が投げかけられている問いだ。「旭ポンズ」で有名な株式会社旭食品（以下、旭食品）も、そんな問いに向き合う会社の一つ。先代の味を守り抜いてきた父親と、その背中を追いかける2人の息子たちに、それぞれの想いを聞いた。

語り手
代表取締役社長／高田悦司（たかだえつじ）
取締役専務／高田雅規（たかだまさのり）
工場長／高田智至（たかだともゆき）

ポン酢にこだわり続けて76年

1948年に創業された旭食品は、悦司社長の父親の代から家族経営で営まれてきた食品メーカーだ。長男の雅規さんは専務として商品の営業や仕入れなどの業務を、三男の智至さんは工場長として製造の現場を担当している。

現在、「旭ポンズ」「うどんだしの素」「そばつゆの素」「旭ぶっかけポンズ」の4つの商品を製造しているが、やはり主役はポン酢。売上の8割以上を占めているということから、その人気ぶりが伺える。ポン酢の味は、先代の社長が自ら調味料の配合や味の研究を重ね、こだわり抜いて生まれたレシピが今も受け継がれている。ラベルにも描かれている柑橘のさっぱりとした味わいが特徴で、夏の暑い日のサラダにも、冬の寒い日のお鍋にもピッタリな商品だ。

味へのこだわりは、素材から始まる。出汁には、北海道の利尻から取り寄せた昆布のほか、国産にこだわった混合節や乾椎茸を使用。ポン酢の味の決め手となるスダチやゆずなどの柑橘類は、付き合いの長い信頼する徳島県の生産者から仕入れている。こうばでは、大きな釜の中に水を張って出汁をとる。そこに柑橘果汁やその他の調味料を混ぜ合わせ、それぞれの商品を全て1つの製造ラインで作っている。瓶を運んだり洗ったりする工程には機械を導入したものの、味を作る工



程は今も人の手で行っているところに、旭食品が味を大切にしていることがわかる。2020年にはこうばを新しい場所に移転したが、その際に創業から受け継ぐ味の再現度をより高めるために、調理工程を数値化したという。

「出汁をとるための水の量や昆布を煮出す時間など、2年ほどかけてデータを取りました。お客さんからも『ずっと変わらん味やね』という声をいただいています。天然の素材を使っているので、どうしても多少のばらつきは出てしまうのですが、製造へのこだわりは変わりません」と、雅規さんは語る。

天然の素材を扱う以上、データでできることには限界がある。その隙間に、作り手たちの研ぎ澄まされた感覚や長年の経験を織り交ぜることで、旭食品の味は受け継がれてきた。



空瓶を製造ラインに乗せる工程や、完成品を荷台に乗せる工程は機械に任せ、その分味を作る工程など人の手でやるべき仕事に専念できる設計に。

器用な会社じゃないので

70年以上に渡って伝統の味を守り続けてきた旭食品に、今大きな壁が立ちはだかっている。それは、天然素材の調達が難しくなってきていること。特に、スダチやゆずなどの柑橘類が問題だそう。温暖化の影響に加えて、雨量のバラつきや台風の被害など、柑橘類の収穫は気候の影響を受けやすい。そこに、農家さんの高齢化による担い手不足の問題が追い討ちをかける。過去にも果汁の仕入れが足りない時代が何度かあったものの、農業の担い手は今よりも多かった。そのため、果汁の仕入れ先を増やすことで当時は対処できたという。

それでも、彼らは産地へのこだわりを捨てない。

「産地あっての旭ポンズなので、仕入れ先をころころ変えるようなことはしません。それに、仕入れ先を変えると、それまで仕入れを担ってくれていた産地の方が売り先を失って困ってしまう。国産に限って仕入れ先を広げることは常に検討していますが、長いお付き合いのある産地の方とはこれからも一緒に歩んでいきたいんです。ポン酢一本で勝負してきた僕たちはそんなに器用な会社じゃない。あれこれと新しいことに手を出すことはせず、今は軸足を立て直す時期です」と、雅規さん。

産地と一緒に歩んでいく決意は固いようだ。

最近は産地まで足を運び、農家さんと一緒に対応策について話し合うこともあるという。智至さんは、「たくさん収穫できた次の年はあまり獲れなくなるなど、年によって収穫量にバラつきが出ることがあります。肥料を上手く使って収穫量をなるべく均一にできないかと、そんな相談もしています」と話す。社会の変化に対応しながらも、先代や社長が大切にしてきた味や産地との関係性をこれからも発展させていく。雅規さんと智至さんの表情には、そんな信念が宿っていた。



（左）昔懐かしいレトロな風合いのラベルは、創業当時から変わらないデザイン。（右）製造現場には新旧の設備が入り混じっており、積み重ねてきた会社の歴史を垣間見るとともに、新たな時代に向かっていこうとする心意気も感じる。

父親の大きな背中を追いかけて

悦司社長が製造に関わっていた当時は、今よりもずっと少ない10人ほどのスタッフで、早朝から夜遅くまで忙しく働いていたという。

「瓶を洗う機械を導入して一日の製造量が増えたので、繁忙期は営業日の前の夜から仕込みをしていました。当時はこうばの裏に家があったので、通勤時間もないからね」

そう話す悦司社長の表情や話しぶりからは、当時たくさんあったであろう苦労を全く感じさせない。そんな社長のもとで育ってきた雅規さんと智至さんの記憶には、幼少期の父親の背中が色濃く残っていた。

「12月のポン酢の繁忙期、日曜日の夜10時から翌日の朝5時までずっと仕込みをしていた父の姿を今も覚えています。父は、社長でありながら誰よりも製造現場に立っていました。命を削って働く背中を見てきたので、僕も頑張らなきゃって思います」

そんな雅規さんの言葉に、智至さんも続く。

「社長がまだ製造現場に入っていた頃は、毎朝パートさんが来られると一人ひとりのところに行って挨拶をしていました。当たり前のことのようで、それを毎日続けられるってすごいことだと思います」

一つひとつ、噛み締めるようにして話す雅規さんと智至さんの言葉を聞いた悦司社長は「恥ずかしいわぁ」と、少し照れている様子。真面目に仕事に向き合う傍ら、苦労話は笑い話に変えてしまう懐の深さをもつ悦司社長の人柄が垣間見えた。

いつの日か、父であり社長である悦司さんからバトンを受け取るその日に向かって、雅規さんと智至さんは父親の大きな背中を追いかける。変わりゆく時代の流れと折り合いをつけながら、旭食品は伝統の味にこれからも向き合い続けていくだろう。



旭食品の取引先は、包装資材の仕入れ先を入れても20社程度。それぞれの取引先と信頼関係を築きながら歩んできた歴史を物語っている。

Go To Next!



開催イベント

Events

FactorISM開催中は、みせるばやおを中心に、いくつかの場所でトークイベントや、展示が行われます。なかなか伝える機会のない日々の取り組みや想い、アーティストとのコラボレーションをお楽しみください。

Talk Event / Exhibition

トークイベント／展示

詳しくはこちら

Opening Session

ものづくり×地域×グローバル 大阪・関西万博ってどないなってんの？

日時　10/24（木）
時間　17:15-18:15
場所　みせるばやお
　　中島さち子 氏
　　（大阪・関西万博 テーマ事業プロデューサー/steAm.inc CEO）

Talk Session

人の心を動かすイベントとは 大阪・関西万博が作り出す未来

日時　10/24（木）
時間　18:20-19:20
場所　みせるばやお
登壇者　中島さち子 氏
　　（大阪・関西万博 テーマ事業プロデューサー/steAm.inc CEO）
　　山中哲男 氏
　　（大阪・関西万博 事業化支援プロジェクトチーム サブリーダー/トイトマ代表取締役社長）
　　太田泰造 氏
　　（FactorISM実行委員長/錦城護謨株式会社 代表取締役社長）
　　津田哲史 氏（ファシリテーター）
　　（経済産業省近畿経済産業局 地域連携推進課 統括係長）

Exhibition

LIVEISM2024 -生きるが、醸す展 -

日時　10/12（土）–10/26（土）
時間　10:00–17:00
場所　みせるばやお、各エリアのまちこうば13ヶ所
内容　まちこうばの端材を活用してアーティストが静物を生物に変換するアートプロジェクト。2025大阪・関西万博で、大阪のまちこうばをパビリオンと見立て、まちこうば×アート作家によるシンボルアートの展示。

※開催場所によって展示時間が異なる場合があります

Special Event

スペシャルイベント

Talk Session

OPEN DIALOGUE by BE THE LOVED COMPANY PROJECT 2024

経済産業省近畿経済産業局では、人を価値創出の源泉とし「人（社員）の幸せを中心に据えた経営」を「人的資本経営」のひとつの可能性と捉え、2022年度から「BE THE LOVED COMPANY PROJECT」を推進しています。
今回のFactorISMのテーマである「醸す（かもす）」を踏まえ、人や組織、そして地域が互いにじっくりと醸成されるような関係性の中で生まれる価値の可能性を、LOVED COMPANYの自律型中核人材とともに探ります。

日時　**10/24（木）**
時間　**15:30-17:00**
場所　**みせるばやお**
登壇者　**王智英 氏**
（株式会社ウエダ本社 いろどるチーム 営業リーダー）

大槻宏美 氏
（株式会社WELLZ UNITED／井上株式会社 チーム経営サポートリーダー）

和田山翔一 氏
（株式会社澤村 ブランド推進室 課長代理）

松尾泰貴 氏（ホスト兼ファシリテーター）
（FactorISM 統括プロデューサー ／ 株式会社友安製作所 執行役員）

藤吉雅春 氏（ファシリテーター）
（Forbes JAPAN 編集部 編集長）

沼本和輝 氏（ファシリテーター）
（経済産業省近畿経済産業局 中小企業調査課 係長／Small Giants Innovator）

プログラム

イントロダクション（15:30-15:45）
BE THE LOVED COMPANY PROJECT について
（経済産業省近畿経済産業局 中小企業調査課 係長 沼本和輝氏）

トークセッション（15:45-17:00）
社員に愛される組織の右腕・左腕の役割と
面的な組織アップデートの可能性

Talk Session

関西オープンファクトリーフォーラム Vol.30 Featuring 八尾ものづくりカレッジ 特別編

「地域一体型オープンファクトリー」とは、近年では、ものづくりに関わる中小企業や工芸品産地など、一定の産業集積がみられる地域を中心に、企業単独ではなく、地域内の企業等が面として集まり、地域を一体的に見せていく取組です。
今回は、さまざまな課題に取り組むために、各地から英知が集まる「大阪・関西万博」と各地のオープンファクトリーがどのような取組が進められているのか、各地で躍動するキーパーソンにお伺いします。

日時　**10/25（金）**
時間　**17:00-19:30**
場所　**みせるばやお**
内容　**「地域」が「万博を活かす」～地域が主役になる重要性～**
登壇者　**益子泰岳 氏**
（一般社団法人関西イノベーションセンター シニアマネージャー）

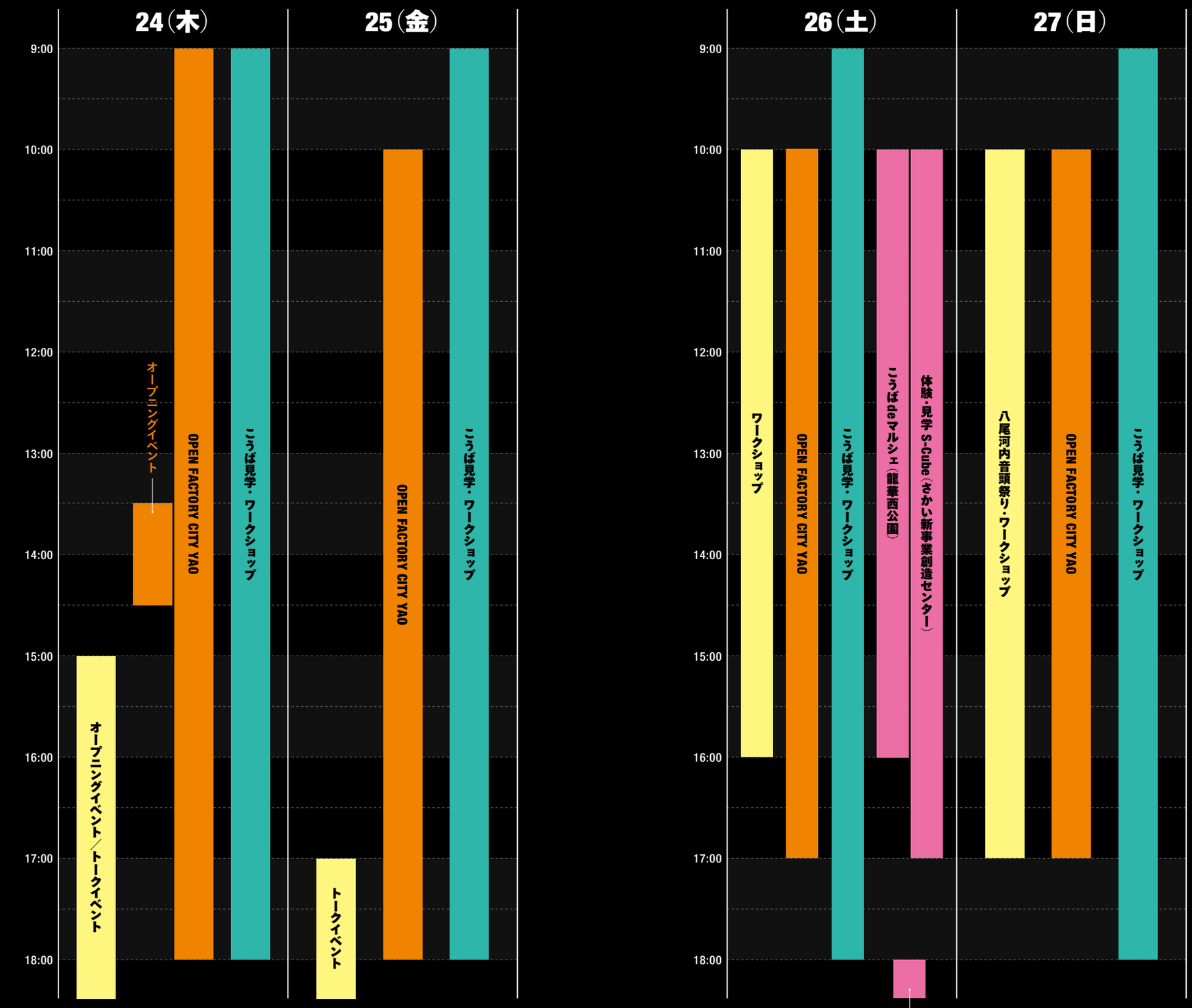
北林功 氏
（COS KYOTO株式会社 代表取締役）

松尾泰貴 氏
（FactorISM 統括プロデューサー／株式会社友安製作所 執行役員）

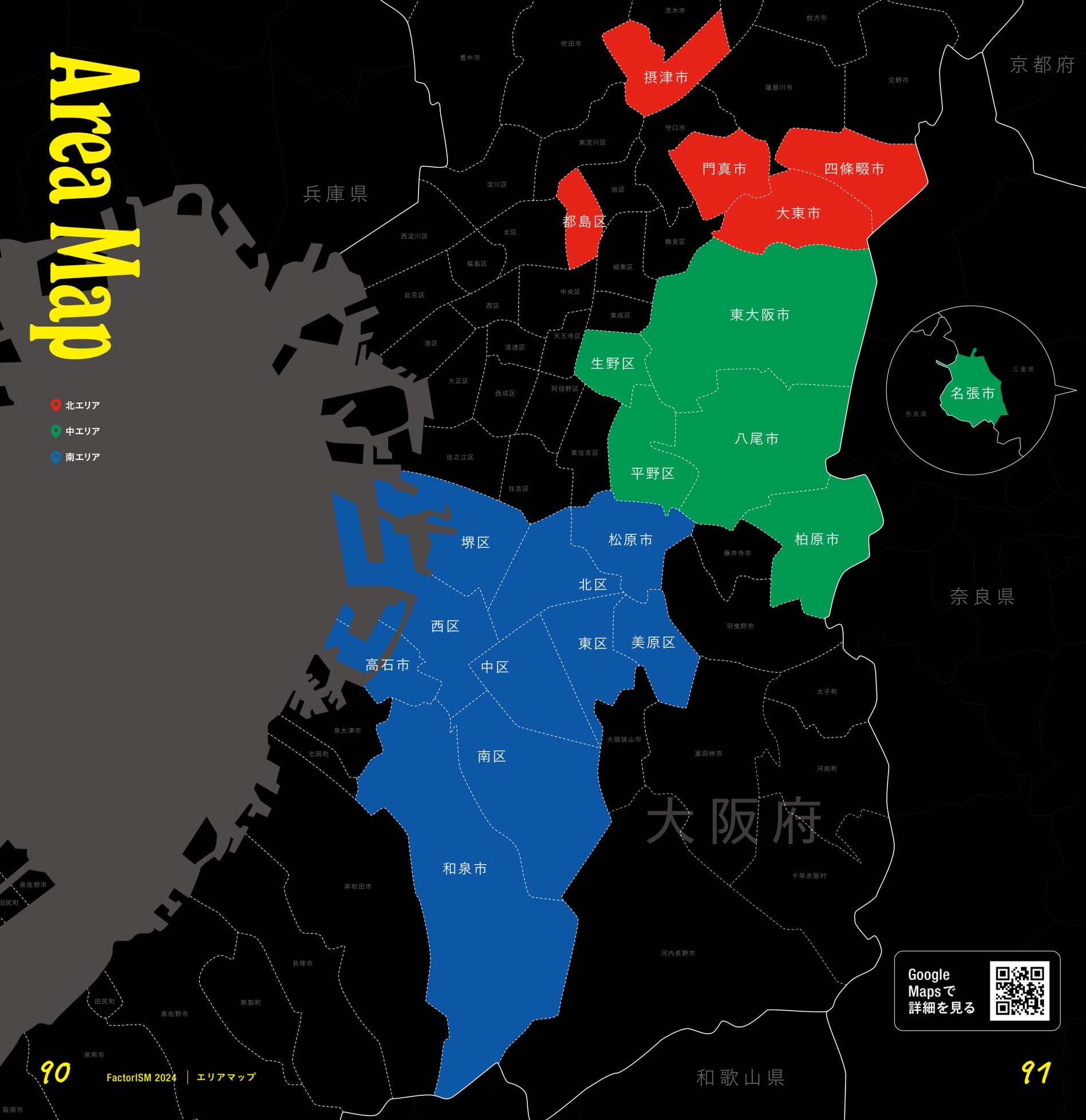
服部滋樹 氏
（有限会社デコラティブモードナンバースリー 代表取締役）

津田哲史 氏（ファシリテーター）
（経済産業省近畿経済産業局 地域連携推進課 統括係長）

Time Table


イベント会場
みせるばやお
アリオ八尾
こうば
その他
24（木）
25（金）
26（土）
27（日）
9:00
10:00
11:00
12:00
13:00
14:00
15:00
16:00
17:00
18:00
オープニングイベント
OPEN FACTORY CITY YAO
こうば見学・ワークショップ
オープニングイベント／トークイベント
トークイベント
ワークショップ
体験・見学 s-Cube（さかい新事業創造センター）
こうばdeマルシェ（龍華西公園）
八尾河内音頭祭り・ワークショップ
ものづくりパビリオン
EXPO酒場 FactorISM店
（友安製作所）

Area Map



Google Mapsで詳細を見る

Satellite Event

サテライト会場と、イベント

詳しくはこちら

北エリア1

まちこうばで集めるバッジリレー

日時　2024年10月24日（木）-27日（日）
各こうばのこうば見学・ワークショップの時間による

場所　北エリアの各こうば

内容　各こうばの特徴を表現したオリジナルバッジを各こうばのワークショップで製作もしくはこうば見学時にプレゼント。布もの工房 北次のサコッシュにバッジをつけて北エリアを楽しみつくそう。

中エリア1

OPEN FACTORY CITY YAO

日時　2024年10月24日（木）10:00-18:00
2024年10月25日（金）10:00-18:00
2024年10月26日（土）10:00-17:00
2024年10月27日（日）10:00-17:00

場所　アリオ八尾2階北西角

内容　オープンニングイベント（24日 13:30-）、
さわる展示、オンラインこうば見学、まちこうばのクイズ大会など

中エリア2

まちのコインページ　*右のチラシを参照

中エリア3

こうば de マルシェ

日時　2024年10月26日（土）10:00-16:00

場所　龍華西公園（JR久宝寺駅前）

内容　ワークショップ、キッチンカー、飲食ブース、雑貨販売など

中エリア4

ものづくりパビリオン EXPO酒場 FactorISM店

日時　2024年10月26日（土）18:00-20:30

場所　友安製作所

内容　FactorISMが大阪関西万博に向けて準備していることを余すことなく体験できます！EXPO酒場 八尾店で打ち出した「LIVEISM ー生きるが、醸す展ー」と堺店の「まちこうばを巡るプログラム体現」に「ナイトオープンファクトリーコンテンツ」を追加したスペシャルな1日です。

南エリア1

S-Cubeで職場見学・仕事体験

日時　2024年10月26日（土）10:00-17:00

場所　S-Cube（さかい新事業創造センター）

内容　オフィス・ラボを開放し、イノベーションと新事業を創造するベンチャー企業の見学や体験を開催






FactōrISM
ファクトリズム
QUON
京都信用金庫
NEP
MINAMIDA
dentsu
JAPAN MADE
NANKAI
日刊工業新聞社

みつける

クイズ

このカタチ、なんのカタチ？

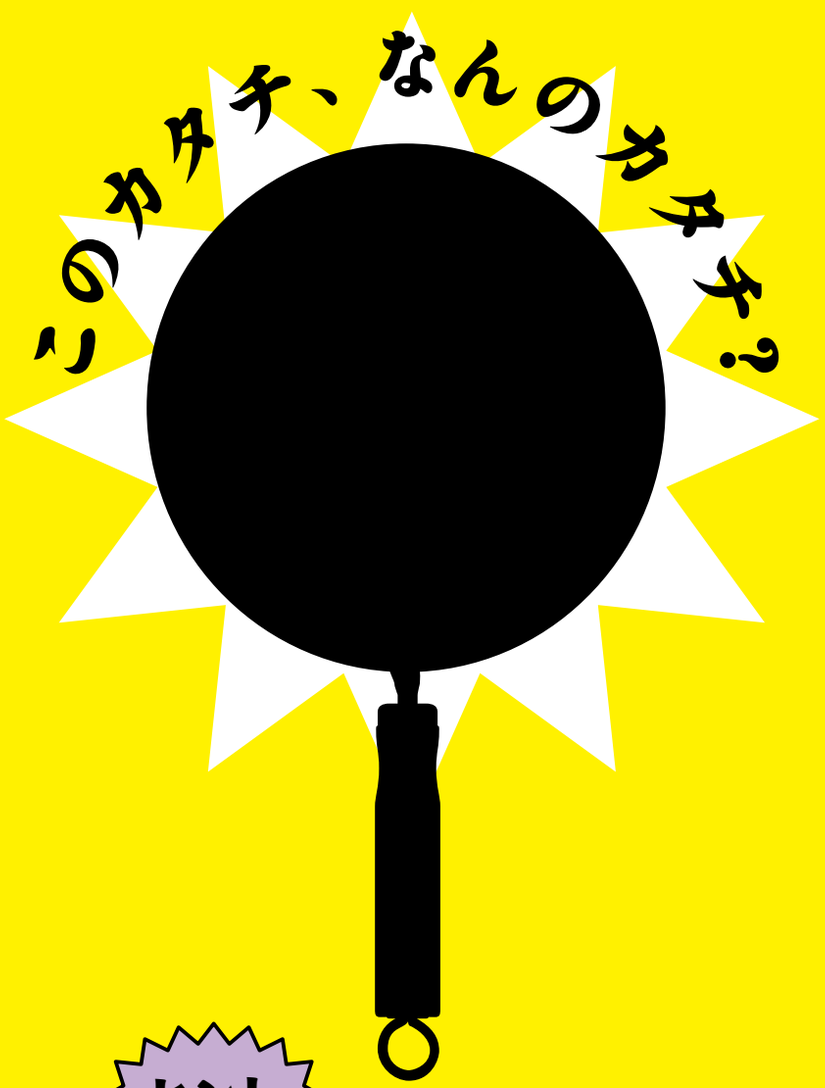
たくさんのこうばで、
たくさんの出会いがあるFactorISM、
おもしろいカタチがたくさんあります。

これは、なんの素材でできているだろう？
これは、なんの部品だろう？

少し目線を変えてみると
よりワクワクした体験につながること間違いなし！

3つのカタチをクイズで出題。
全問正解できるかな？

Q



ヒント

とても、かたい。

色は黒色が多い。

A

正解は…

鉄製のフライパン！



作っているのは、大阪府八尾市で1951年に創業した藤田金属株式会社。フライパンをはじめ、鍋やヤカン、コップなどの金属製品を数多く作り続けています。世の中には料理に使われる道具がたくさんありますが、その中でも藤田金属のフライパンを選んでもらえることがなにより嬉しいこと！日常を楽しくする道具を目指して、今日もこうばで励みます。



藤田金属へ
遊びに行く
P.75へ

Q



ヒント

乗り物の一部。

誰しもが、子どもの頃に
乗りたくなるもの。

（もちろん、そうでない人もいる）

A

正解は…

自転車のハンドル！



作っているのは、大阪府堺市で1933年に創業した株式会社小泉製作所。パイプを中心とした曲げ加工、溶接、表面処理などが得意です。こうばの始まりは自転車用ハンドルの製造。こうしたハンドルは、実は職人たちのパイプの曲げ加工技術によって、一つずつ作られているのです。最新（日本最軽量）の電動ママチャリやロボットまで作っています。



小泉製作所へ
遊びに行く

P.51へ

Q ラスト

このカタチ、なんのカタチ？



ヒント

毎日つかうもの。

犬用もある。

A

正解は…

ハブラシ！



作っているのは、大阪府八尾市で1949年に創業した有限会社多葉刷子工業所。「刷子」の読み方がわからない方も多かったのでは？これは「ブラシ」と読むのです。カタカナで目にすることの方が多いかもしれません。1日最低でも2回、年間で700回以上、使用するハブラシ。そんな毎日の相棒と言っていいハブラシを作り続けています。



多葉刷子工業所へ
遊びに行く
P.52へ

何問正解できたかな？
いろんなカタチをこうばで、
探してみてね！

めぐる

学んで、遊んで、1日体験コース

巻の五十四 ふたつのこうばに ご案内



「コンペイトウ王国 大阪糖菓」さん

「ランドセル工房 生田」さん



5年目となる今年は「醸す」をテーマに、ものづくりの現場を子どもたちと一緒に見学する企画を開催！子どもたちはワクワクとドキドキの心持ち。そして、受け入れてくださったこうばや職人さんたちも、子どもたちに分かるように説明したりすることで、何かが醸成された様子。今回は表情豊かな4人の子どもたちと一緒に、金平糖を作る「コンペイトウ王国 大阪糖菓」さん、ランドセルを作る「ランドセル工房 生田」さんのこうばの見学風景をご紹介します。



金平糖づくりに挑戦 大阪糖菓さんへ行ってきた!

最初に伺ったのは、国内で金平糖を製造する9社の中でも、西日本で最大の出荷量を誇る大阪糖菓さん。金平糖の他にも90分舐め続けられる「90分キャンディ」や地産地消をテーマにしたお菓子など、ユニークな商品が多く製造されています。今回は金平糖づくり体験に加えて、特別にこうば内の見学もさせていただきました。

金平糖づくり体験スタート!



コンペイトウ王国の可愛い衣装に身を包んだ野村社長が、金平糖の製造過程を映像と共に説明してくださいました。真剣に話を聴く子どもたち。いや、早く食べたそうな気も。



あおしくん、たいきくんは「ぶどう」と「メロン」味、よしとくん、みおりちゃんは「レモン」と「ぶどう」味に挑戦。色蜜を入れて金平糖の色が変わっていくのを見て、おぉ〜と声が。



黙々と金平糖をかき混ぜるたいきくんは「混ぜる作業が一番楽しかった!」と後から話してくれました。体験してみて気付いたけれど、職人気質なのかも?とお母さんも語ります。



よしとくん、みおりちゃんは初めて金平糖を食べたそうです。自分で作った金平糖を食べて「おいしい。食べてみて〜」とお母さんにも。





家では料理もするという、よしとくん。「優しく混ぜないと鍋からこぼれちゃうぞ!」と、鍋底についた金平糖を真剣にチェック。

特別体験!



甘い香り漂うこうばの室温はなんと47度。子どもたちからは「暑すぎる!!すごい!!!」と声が飛び交いました。「蜜が馴染んで乾きやすい高温設定をすることで、フォルムの美しい金平糖が仕上がるんです」と職人さんたち。

1分間かけて二回転する直径180センチの巨大な釜の中で、少しずつ大きくなる金平糖。蜜をかけるタイミングなどは機械で慎重に管理しつつ、職人さんたちが手作業でかき混ぜていきます。大阪糖菓の金平糖のこだわりは美しい「ツノ」。1日に1ミリずつ、手間暇をかけて大きくしていくことで、ツヤと透明感のある美しいツノができるそうです。

よいしょ〜!とかき混ぜる!



「私たちの仕事は、金平糖を作ること以上に、懐かしいという感情をつくることなのかもしれません」と語るのは営業の濵田さん。



すべて手作業でつくる オーダーメイドのランドセル

本革によるオーダーメイドのランドセルを製造する、生野区にある生田さん。裁断から縫製、糊付け、ミシン掛け、組立、検品にいたるまで全ての工程を完全自社生産で行うことで、細かなオーダーメイドに対応されています。今回はそんな生田さんの店舗と、ランドセル工房で職人さんたちの手仕事を見学してきました！



まずは、ランドセルを紹介しよう。

金平糖づくりでちょっと疲れた様子？と思いきや、「このパーツはどこでしょう？」と社長が聞くと「ここや！」と食い気味な子どもたち。店内には、実際に6年間使用されたランドセルも展示されており、ほとんど新品では？と思うほどの綺麗さ。表面加工の技術が発達し、革の強度が高くなりひび割れも起こりにくいそう。また、教科書サイズの変更により、ランドセルのサイズも少し大きくなったりと、時代の変化にも合わせたものづくりが伺えます。



約70年前のランドセル



「いっぱいランドセルがあってすごい！たくさんの工程があるのに15人で作っているのがすごくて、ランドセルを綺麗に使おうと思った」とあおしくんが教えてくれました。

ランドセルの構造は年々複雑になっており、6年間しっかり保たせるために構造をアップデートしたり、お客様の声を聞いて改良を繰り返しているそうです。



こうばツアースタート！



ランドセルを作る工程は、なんと300工程。パーツも細かいものまで含めると、200ものパーツがあるそう。数字だけ見ると気の遠くなる作業ですが、職人さんたちが一つひとつこなれた手つきで製作しています。工房には現在、15名の職人さんたちがプレスカットやミシン、貼り付けなど分担して作業を行っています。それぞれの専門がいるわけではなく、広い守備範囲をカバーしながら、その日その日で別作業を行うことも多いそうです。



革に傷や欠陥がないか、一枚一枚確認する職人の野口さん。大きな一枚の革をロスが出ないようにパーツごとにカットする作業は、パズルのような頭脳が求められます。「ほら、ここちょっとキズがあるの分かる？」と職人さんが革を見せてくれました。目を凝らしてよーく見ると、確かに小さなキズが。すごいぞ、熟練の目利き力！！

ランドセルを縫うミシンや革を加工する機械は、なんと50年以上も前のものもあります。大切に扱われてきた機械を使い、現代の職人さんたちの手で出来るランドセルたち。





生田のランドセルがオーダーに対応できる理由は、一つひとつが手作業のため。各工程の職人さんたちの手によって、徐々に組み立てられていきます。

カットプレス担当の野口さん、ミシン担当の植田さんなど、色んな職人さんたちが子どもたちに製作過程を丁寧に、たくさん見せてくださいました。ものづくりの楽しさは、こうして伝わっていくのかもしれません。



錦城護謨株式会社 × 株式会社わざわざ

「良い使い手」ってなんだろう。

がかんがえる。

はなす

たくさんの作り手たちと出会えるFactorISM。
作られるものは、使われることが前提にあります。
そう考えた時に、「良き使い手」ってなんだろうと思ったのです。

作り手でありながら、使い手である視点をもって
立ち上げた自社ブランド「KINJO JAPAN」の錦城護謨株式会社。

そして、「よき生活者になる」を合言葉に掲げ、
使い手でありながらも伝え手をも担う、株式会社わざわざ。

それぞれの視点から、
「良き使い手」にまつわる話を伺いました。

PROFILE



平田はる香

Haruka Hirata

株式会社わざわざ 代表取締役

—

2009年長野県東御市の山の上にパンと日用品の店「わざわざ」を一人で開業。2017年に株式会社わざわざ設立。2019年東御市内に2店舗目となる喫茶/ギャラリー/本屋「問tou」を出店。2023年度に3,4店舗目となるコンビニ型店舗「わざマート」、体験型施設「よき生活研究所」を同市内に出店。2024年9月にはわざマート諏訪店を出店。『よき生活者になる』をわざわざの合言葉に掲げる。



あかしゆか

Yuka Akashi

わざわざ よきマガジン編集長

—

1992年生まれ、京都出身。ウェブ・紙問わず、フリーランスの編集者・ライターとして活動している。2020年から東京と岡山の2拠点生活をはじめ、2021年4月、瀬戸内海にて本屋「aru」をオープン。2023年『山の上のパン屋に人が集まるわけ』の編集を担当したことをきっかけに、わざわざのメディア「よきマガジン」の編集長も務めている。



水田竜平

Ryohei Mizuta

錦城護謨株式会社 業務統括部企画課

—

2003年、大学で土木工学を学び卒業。ゴム製品のメーカーでありながら、軟弱地盤の改良工事を手掛ける土木事業部があるユニークさに興味を抱き錦城護謨に新卒で入社。以降約20年間、土木事業部に所属し日本全国で現場管理や営業を担当。2020年に立ち上げた自社初となる toC 向けオリジナルブランド「KINJO JAPAN」の中心メンバーの一人。2022年、自社初の広報担当となる。

作り手、伝え手、使い手を行き来しながら。

水田さん；最近、嬉しかったことがありまして。

平田さん：おっ、なんですか。

水田さん：私たちの錦城護謨の自社ブランド〈KINJO JAPAN〉[※1]の袋を持った人が、社員の子供の授業参観にいた！と（笑）。自分たちの生活の中に、自分たちの商品がひっそり馴染んでいることを知る機会があると、作り手としてはすごく嬉しいんですよね。平田さんとあかしさんが、実際に作り手の思いに触れる機会ってありますか？

平田さん：わざわざ[※2]を初めて16年経つのですが、取扱商品の95%以上を私が買い付けしています。生産地も回り続けている中で、使い手でありながら伝え手でもあると考えてます。

水田さん：使い手でありながら、伝え手ですか。私自身も作り手でありながら広報も担っているので確かに伝え手でも、あるように思います。また、ものづくりの社内工程の中では、次の部署にバトンタッチを繰り返していくことが多いです。その際、次の人も僕は使い手と思ってパスすることが多いです。その使い手がしんどい作業にならないように、というように。

平田さん：作り手も使い手と行き来して、ものづくりをしていくんですね。小売業である、私たちは作り手と使い手のあいだにいる、伝え手だと思っています。物を購入するときも、飲食店で食事するときも、小売業の視点が入っちゃって。あれ？これって安すぎないか？とついつい考えちゃいます。価値に対価をいただくのは当たり前ですし、正しい値付けで儲かる事業体にするのが大事です。よって、作り手には時折伝えています。

—今の話をきいて、〈KINJO JAPAN〉の製作時の苦労はありますか？

水田さん：〈KINJO JAPAN〉をやるときも、電卓をかなり叩きましたね（笑）。作り手でもある自分たちがほしい！と思える値段で、最後は決めました。当時の行き当たりばったりな値付けで苦労することももちろんありますけど、右も左もわからなかったからこそ経験できたこともたくさんあったなと振り返ると思いますね。いろいろと伝えられるネタができたなぁ、勉強しながらやっていかないとなぁという気持ちです。

あかしさん：私自身も、本を作ることもあるので、常に学びながら、作り手と伝え手と使い手をそれぞれ行き来しているような感覚があります。商品を販売したり、メディアで紹介したりするとき、直接作り手の人の話が聞けたかどうかは、とっても大事にしていて。物の良さだけではなく、その周辺にある大事にしていることや思想などは、実際に会ってお話しを聞かないと見えてこないことも多いですよね。

水田さん： 僕たちの想いや背景も、惜しみなく伝えていきたいです。だからこそ、FactorISMに実際に足を運んでもらって、使い手のみなさんに直接現場を知ってもらえるのはすごく嬉しいことです。それぞれのこうばにそれぞれの良さがあると思っています。

※1 KINJO JAPAN
錦城護謨の「割れないシリコーンロックグラス」をはじめとするプロダクトのプロジェクト名。錦城護謨にとっては、はじめてのBtoCプロダクト。2019年開催の「Yaoya project」という八尾市主催の事業内で生まれた。

※2 わざわざ
2009年長野県東御市御牧原の山の上にパンと日用品を販売するお店が誕生。公共交通機関がなく車でしか訪問することができないため『こんな山の上までわざわざ来てくださってありがとうございます』という、感謝の気持ちが名前に込めてある。わざわざ以外に、喫茶/ギャラリー/本屋「問tou」、コンビニ型「わざマート」、体験型施設「よき生活研究所」を出店。（2024年9月現在）

「良い」はひとそれぞれ。だからこそ、自分でみつける。

―良い使い手とはなんでしょう？

平田さん：わざわざは「よき生活者になる」という合言葉をかかげています。じゃあ、よき生活者ってなんなんだ?という問いに対して、良いと感じるものは人それぞれであり、誰かに提示されるものではないっていうふうに考えているんです。自分の身体と心に耳を傾けて、常に対話を繰り返して見つけるしかないのだと思います。

水田さん：僕たちが「みせるばやお」で商品開発をする際も、自分たちにとって何が良いかはとても大事にしていましたね。僕たち自身が作り手でもあるし、使い手になるからこそ、自分たちにとってのほしい！という気持ちや心地よさを優先していました。だからこそ、ゴムでできたグラスが生まれたように思います。

あかしさん：良いというものが何なのかを捉えようとする日々の試みが大切なのかもしれません。ただ、それって簡単なことではないと思うんです。自分の過去の体験やいろんな経験を積み重ねながら、自分自身と対話を繰り返して、ようやく見えてくるような。

平田さん：そうですね。わざわざの「良い」はこれです。と強要したり、人に押し付けたりすることもしたくない。ただ、心から良いと思えるもの※3の基準は作っています。

※3 わざわざの商品選定基準

1. 長く使えるもの
2. 飽きのこないもの
3. 暮らしに寄り添うもの
4. きちんと作られたもの
5. 環境に配慮したもの

水田さん：良いって本当ひとそれぞれだよなぁと、話をきいていて更に思いました。例えば、僕自身の良い使い手ってなんだろう？って考えたときに、その物に想いがちゃんとのせられる状態というか、ポジティブな感情が物にのっているようなイメージですかね。

平田さん：私は健康原理主義者でして……。健康であれば、なんでもいいって思っているところがあるんです。健康な状態であれるもの、ですね。ちゃんとよく寝て、よく食べ、よく運動し、よく笑い、よく働くというような。それは今、ある限りある命をどれだけ真っ当して死ぬかという話になるんです。与えられた命を真っ当するために健康でいようと思っているんです。それが私にとっての「良い」ですね。

あかしさん：私は割と、水田さんの感覚に近いですね。物に対して、自分がどんなふうに心が震えるか、とか動くのか、とか。そんな心の動きを見ているような、感じているような気がしています。なので心が動くことが、自分にとっての「良い」かもしれません。平田さんは、健康を損なうような食事をしちゃったりすることないんですか?（笑）

平田さん：それが……。この前ジムに筋トレに行く前に、こ〜んなに大きなパフェを食べちゃったんです。血糖値が上がって、そのあと公園で一人寝ていました。

一同：（笑）

あかしさん：心にとって良いと、体にとって良い状態がありますもんね……！

平田さん：いやでも、後悔しました……。あんなに大きいパフェは……。

作り手、使い手、伝え手。とはいえ、みんな生活者。3人それぞれの物のよもやま話。

不必要かもしれないけど、愛おしいもの

平田はる香



わざわざの商品とは関係ないものを持ってきちゃいました（笑）。中国の陶器でできた置物です。銀座を仕事帰りにふらふらと歩いていたら、ギャラリーのガラスケースの中に一人でたたずんでいたのがこの子。中は真っ暗でなにも見えないのですが、妙に気になって店の前を繰り返し行ったり来たり。実はそのあいだ、店主が店の中から私のことを観察していたようです。声をかけてもらい、いろいろと話をして、購入をすることに。必要不可欠なものを事業でやっている分、そうじゃないものの存在がとても愛おしくて仕方がなく感じます。

自分の身体に寄り添うもの

あかしゆか

わざわざで購入するものは主に日用品。イマイ醤油や化粧水の朝摘みばら水は繰り返し購入しています。日々使うことで、自分の身体や肌にどんどん心地よさが浸透していってる感じがするんです。あとは、毎日つけているピアス。5年ほど前に、夫から贈り物でもらいました。ピアスって自分の顔の横に常にあるので、もう顔の一部というか、自分に馴染んでいるものになっています。常々しずかに寄り添ってくれるものが、大事なもののひとつにあるかもしれません。

生活に馴染んでいる自社商品に感動

水田竜平

僕は、錦城護謨に土木事業で入りました。なので、ゴムの事業のことは実はあまりよく知らない新入社員だったんです。それが、働いているうちに、あれもこれも錦城護謨の商品だったんか!!と驚きの連続で。例えば、電気シェーバーのゴムや炊飯器のパッキンのゴムなど。当時は実家暮らしだったので、家族にこれもこれも、錦城護謨の商品なんやでとよく自慢していましたね（笑）。自分たちの作っているものが、自分たちの生活に馴染んでいることほど嬉しいことはないなと思った瞬間でした。

Episode

こうばも日夜変化する
堺の風土に育まれた事業のカタチ

有限会社
関西貿易

社会の変化やお客さんのニーズに敏感になることは、会社の事業を育てるためには欠かせない。有限会社関西貿易（以下、関西貿易）は、創業当初の貿易業から事業を変更し、現在はこうばの中で使う機械や器具を作っている。その背景には、会社の外にも目を向けながら、日々学び続ける作り手たちの仕事への姿勢があった。

語り手
代表取締役社長／森勲（もりいさお）
製造本部 営業課／森陽裕（もりようすけ）

ニーズに応えるためになんでもやる

関西貿易は、こうばで使う機械や器具などをオーダーメイドで作る会社だ。例えば、こうばの中で部品を運搬したり組み立てたりするための機械や、荷物を運ぶ時に使うパレットやラックなど、大きな機械から小さな器具まで作るものは様々。自動車やトラクターなど、自走できる機械製品を作っている会社をお客さんに多く持ち、こうばの中には自転車の部品やトラクターの操縦席を運搬するための荷台など、見た目も大きさも異なる機械や器具が立ち並んでいた。

設計から製造までをワンストップで担うことでお客さんの負担を軽減できる点に、関西貿易は強みを持つ。商社と提携している会社の場合、機械を作るために必要な工程を商社が選定したいくつかの会社に分業してもらうことで、一つの製品が作られる。分業すると一社あたりの負担は減るが、勲社長はお客さんにとってはデメリットになる可能性を指摘する。

「分業する場合、他社のミスを別の会社がカバーできないので、過剰なほど高い品質が求められ、時間もかかるし値段も上がってしまう。一方、ワンストップの場合はどこかの工程で多少ミスがあっても次の工程で調整ができ、かかる時間も短縮できます」



そうした品質を実現しているのは、業界で圧倒的な設計力だという。通常、製作に至るまでには数百枚の二次元図面（紙図面）を必要とするが、3D CAD図面でお客さんとやり取りすることで、モニター画像で双方確認しながらの製作、組み立てが可能になる。時間が短縮できるだけでなく、製作時に起こりうるトラブルを図面上で発見できて問題を未然に防げるのだ。

お客さんファーストな関西貿易では、お客さんが希望する機械が実現できるかどうかを判断するため、時には動力の計算などで協力することもあるという。こうした関西貿易の仕事の姿勢は、お客さん目線から出した答えのようだ。



関西貿易では、2022年に「学生に教えたい“働きがいのある企業”大賞」の特別賞も受賞。他社から得た学びの成果は着実に出ているようだ。

堺の風土が会社を変えた

気になるのは、その社名。「貿易」という言葉がついている理由を伺ってみると、創業当時はものづくりに必要な材料の輸出や輸入を行う貿易業がメインだったという。現在の事業に至った背景の一つは、周辺企業からの要望が変わったこと。元々、自転車部品メーカーの技術者だった勲社長は、ものづくりに携わる同僚や先輩が多くいた。すると、周囲の知り合いたちから、勲社長のもとに「こうばで使う機械や器具を作ってほしい」という相談が来るように。そんな声に応えているうち、会社の事業が徐々に変わっていったという。

「業界全体の変化と、こうばが多く集まる堺の風土が、僕たちの会社のカタチを変えてくれました」と、勲社長。堺の作り手たちの声に耳を傾けながら、社会の変化に柔軟に対応してきた社長や会社の懐の深さも感じた。

そして、事業の方向性を変えて様々な仕事を受注していくうちに、関西貿易に求められる技術は年々高くなってきているという。

「続けていくうちに、製造に必要な技術や知識が社内にたくさん蓄積されました。昔は苦労した仕事でも、今なら難なくできる気がします。お客さんに育ててもらいました」





（左）会社で取り組む年間表彰は、事務所の入口付近に飾られている。勲社長は「会社の外で学んだことは、社風に合えばどんどん取り入れます」と、学び続ける姿勢を崩さない。（右）将来的には、自動車メーカーが多い北関東にもこうばを構える展望も。現在は月に約60〜80件受注しているが、製造拠点を増やすことでその数を150件ほどまでに増やす狙いだ。

会社の専門領域を明確に定め、その道一筋にものづくりをするこうばのイメージとは打って変わって、社会やニーズの変化に後押しされて事業内容まで変わることがある。こうばの技術力は日進月歩で変化し続けているのだ。

内と外で学びつづける

勲社長の息子である陽裕さんは、以前は食品関係の会社で営業職として働いていたが、新型コロナウイルスの感染が重症化したことをきっかけに、長期入院をすることに。病院で時間を過ごす中で自身の将来を見つめなおし、一度違う世界に飛び込んでみようと、父である勲さんが営む家業に入ることを決意した。その2ヶ月後、同じく営業職として働いていた弟の健司さんも入社。他にも、関西貿易には別の業界で働いていたスタッフが多いという。

どのようにして知識や技術を学んだのか聞いてみると「手取り足取り教わるのではなく、基本をまずは教えてもらい、わからないことは自分で調べる文化があります。隣で自分が知らない作業をしている人がいたら、後から調べて学んだりしていますね。初めは点としてバラバラに存在していた知識が、続けていくうちに繋がって、線になっていく感覚が面白いです」と、陽裕さん。会社には盗めるほどの技の蓄積があるらしい。

さらに、彼らは会社の外でも学ぶ姿勢を崩さない。他社を見学する機会も多い勲社長は、そこで学んだ視点や仕組みを自社に取り入れることにも積極的だ。

「例えば、FactorISMの運営事務局でもある友安製作所からは『年間表彰』という仕組みを学びました。表彰制度があると、表彰されたスタッフに日頃の感謝を伝えるきっかけにもなるし、一人ひとりがどんな仕事をしているのかを他のスタッフたちが知るきっかけにもなるんです」

真似ることから学びは始まる。会社の殻にこもらず、外に出て学ぶ姿勢を忘れない一面にも、社会やニーズの変化に合わせて柔軟に事業を変えてきた関西貿易のマインドを感じる。「現状維持は衰退だ」なんていう言葉もあるが、学び続けること、そして変化を恐れないことの大切さを、彼らはまさに体現していた。



「発展している会社の共通点は、事務所が部署ごとに分散せずに一体化していること」と、勲社長。事務所づくり一つをとっても、他社から得た学びを生かすことに抜かりがない。

Go To Next!

Episode

一歩先んじる視点で 金型とものづくりの未来をかたどる

株式会社
ウチダ

現代の暮らしに欠かせない自動車の部品は、低燃費で効率よく走るための軽さと、衝突から人を守るための頑丈さの両方を持ち合わせていないといけない。そんな部品を設計するには、緻密な計算と何回にも渡る調整が必要だ。株式会社ウチダ（以下、ウチダ）が追求するのは、そんなわがままを叶える金型づくり。「一歩先んじよ」という会社に息づいた文化が、彼らの技術力を育んだ。

語り手
代表取締役社長／内田祥嗣（うちだよしつぐ）
技術課／薮内慶太（やぶうちけいた）

車の丈夫さは金型から決まる

こうばの中にある大きな機械を指さし、ニコッと笑う技術士の薮内さん。ウチダが作っているのは、自動車の部品を作るための金型だ。部品に使用する素材を金型に挟んでプレスすることで、車の骨格部分にあたるフレームなどの部品を作っている。そして、一つの部品を作るには複数の金型が必要だ。技術士が3D CADと呼ばれるツールで設計し、技能士が実際の金型を組み立て、実践と調整を繰り返し、約1年という時間をかけて金型を完成させる。それが車一台分の部品となると、どれほど大変なのだろうか。自動車メーカーがデザインしたどんなに素晴らしい車も、地道な改善なくしては形にならないのだ。

車の部品に求められるのは、燃料消費を抑えるために軽いこと、そして衝突から人を守るために頑丈であること。アルミ鍋と鉄フライパンを想像してほしい。それぞれを強い力でコンクリートに打ち付けた場合、簡単に曲がるのはやはり重量が軽いアルミだろう。この例からは、軽さと頑丈さは共存できないもののように想像されるが、驚くことにその二つの要求を叶える夢のような素材があるという。それは、「高張力鋼板（こうちょうりょくこうばん）」という素材。「超ハイテンション材」（以下、超ハイテン材）とも呼ばれ、一言で表すならば「とてつもなく硬い鉄の板」だ。超ハ



イテン材は、その硬さゆえに強くて伸びにくいことから、金型で押すと割れてしまったり、金属の反発が起こって思うような形にできなかったりと、加工が難しい代物だ。ウチダはこの素材を加工できる金型づくりを世界で初めて成功させ、複雑な凹凸や湾曲を実現する技術において、世界トップクラスの実力を誇っている。

難易度の高い超ハイテン材を加工する金型の設計には、高い精度が求められる。「金型を支える土台の柱の基本幅は30ミリメートル。中には40ミリメートルのものもあります。この大きさ一つひとつには、必ず意味があるんです」と、薮内さんはメジャーを片手に説明してくれた。きれいなカーブをつけたり金属の反発を抑えたりするために、超ハイテン材に直接触れる金型本体はもちろん、土台となる柱一つをとっても計算しつくされた設計となっていた。



理論に基づいて金型を設計・製造する人を技術士、出来た後にわずかな誤差を微調整する人を技能士と呼び、金型づくりにはその両者が求められる。

勝因は、時代の潮目を読んだこと

ズシンと響く振動を体で感じながら、整然と並ぶ機械の間を抜けてこうばを奥に進むと、ひときわ大きな機械が目に飛び込んでくる。1600トンの重さで圧力をかけて、鉄を曲げたり、型を抜いたりするプレス機だ。超ハイテン材の加工では、この大迫力の機械が要になるという。

このプレス機の裏側には、ウチダの会社そのものを象徴するエピソードがある。「1991年にバブルが弾けて、その翌年にこのこうばを建てました。当時は自動車のモデルチェンジが少なく、金型の仕事も極端に減っていたので、最悪の経済環境でしたね」と、内田社長は当時を振り返る。

そんな中、キーマンとなったのは取締役統括部長の大原さん。当時、自動車業界では生産拠点やマーケット開拓を目的としたアジアへの進出ラッシュがあった。アジアの現場を直接見に行って時代の変化を肌で感じた大原さんは、「最新鋭の機械を設置するためにはもっと大きな社屋を作らなければ」と強く思ったという。

新たな社屋を建てることを決めたその直後、バブル崩壊は訪れた。このままでは会社が半年もつかどうかという苦しい経営状況の中、アメリカへの日本車の輸出事業が急拡大する時代が到来。社屋を新しくし、より強力な設備で最新技術を追求できる製造環境を先んじて整えていたことが勝因となり、ウチダはその波に勢いよく乗ったのだ。



（左）車のどの部品を作るかによって、金型に求められることは変わる。ウチダは車の内部部品のための金型を作っているため、見た目よりも強度が重視される。（右）実現が難しい部品の相談をされた時に、金型のプロとしてどうすれば理想の形に近づくかを考えて提案することもウチダの重要な役割だ。

「社屋を建てた時に設備投資した800トンのプレス機は、当時の業界ではありえない大きさだったんです。しかし、早いうちから社屋を拡張していたおかげで、2001年には超ハイテン材の加工に欠かせない1600トンのプレス機も導入できました。そうした設備がこれからの時代は必要になるということを、大原がお客さんとの会話の中で掴んできてくれたおかげで先行投資ができ、会社の今につながっています」様々な情報を自らの足で集め、時代の流れを予測し、「一歩先んじる」。製造現場を力強く支える1600トンのプレス機は、お客さんの要望に真摯に向き合うウチダのものづくりの姿勢そのものを表しているのだ。

新たな世代、また一歩先を臨む

新しい設備を投資して時代を築いた第一世代。超ハイテン材を採用し、世界初の技術を確立させた第二世代。そして、会社のこれからを作る第三世代の若手たちも、また次の未来をまっすぐ見つめている。

金型の設計に携わること約10年、会社の第三世代を担う一人でもある薮内さんは、「日本のものづくりの価値観は過去に培ってきたノウハウを大事にしすぎるがゆえに、新しいテクノロジーに乗り遅れていると感じます」と言う。

世界では、二次元から三次元での設計へとテクノロジーの移行が完了しており、AIを用いた設計技術が登場するなど、業界の変化は激しい。

「現代は、1、2年前にはなかった技術や製品がどんどん生まれてくるような変化の激しい時代です。過去に固執していては時代の流れに乗り遅れ、いずれそのツケが必ずまわってきます。新しい技術や考え方を受け入れ、変化を恐れずにいたいですね」

そう語る薮内さんは、口調こそ穏やかでありながら、熱意を持って会社や業界の未来を見つめている。バブル崩壊前に社屋の新設や大きな設備投資に取り組んだ先代のように、ウチダのこれからを形づくっていく第三世代にも「一歩先んじる」文化は確かに受け継がれている。ウチダの手がける金型は、日本のものづくりの未来をもかたどっていくのだろう。



金型メーカーと部品メーカーは、いわばパートナーのような存在。内田社長は「新車を出すことが決まったら、準備期間から取引先と伴走します。そこには信頼関係が欠かせません」と話す。

Go To Next!






溶接
QUON
LIMITED EDITION



応援パートナー

プラチナパートナー

KOIZUMI

ゴールドパートナー

九旦 株式会社旭食品
KINJO 錦城護謨
コミュニティ・バンク京信
QUON
Technology With Heart TAKAYOSHI
友安製作所

シルバーパートナー

ICHINOSE
近畿日本鉄道
布ものの工房
MEIWA 株式会社明和食品
MINAMIDA
NAGISA GIKEN Co., Ltd.
西川由染晒工場
NEP NIPPON EC PARTNERS
SILVER
YOSHIKAWA

ブロンズパートナー

ヤスオカ

コラボレーションパートナー

078 KOBE
akippa
dentsu tokyo/osaka/nagoya
MOBIO ものづくりビジネスセンター大阪
MUIC Kansai
S-Cube さかい新事業創造センター
Forbes JAPAN SMALL GIANTS
JAPAN MADE PROJECT URBAN RESEARCH Co.,Ltd.

メディアパートナー

日刊工業新聞社
読売新聞

クリエイティブ監修

友安製作所

共催
みせるばやお／一般社団法人ベンチャー型事業承継／おふらぼ

後援
近畿経済産業局／近畿財務局／大阪府／大阪産業局／大阪観光局／八尾市／堺市／門真市／大東市／柏原市／松原市／高石市／四條畷市／名張市／名張商工会議所／八尾市観光協会／大東市教育委員会／柏原市教育委員会／名張市教育委員会／四條畷市教育委員会／京阪ホールディングス

協力
堺商工会議所／堺市産業振興センター／南海電気鉄道株式会社

FactorISM実行委員会

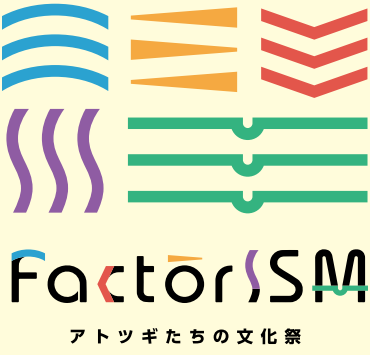
実行委員長	太田泰造
副実行委員長	友安啓則
北エリア支部長	北次孝得
中エリア支部長	梶原弘隆
南エリア支部長	福田康一
北エリア副支部長	一瀬勇樹
中エリア副支部長	北村悠太郎
中エリア副支部長	髙島小百合
南エリア副支部長	小泉達哉
南エリア副支部長	西川由一
統括プロデューサー	松尾泰貴
事務局長	野村範仁
プランナー	寺田昌樹
幹事	山田紘也
事務局メンバー	水田竜平／中西進之輔／今中正人／林卓司／森雪尋／鈴木宏昭／藤田隆司／荒木宏介／小池直毅／松原圭／西田吉孝／松江孝哉／岡崎拓也／奥本大貴

プロモーション	村山康子
LIVEISM プロデューサー	小島ハモニズム和人／松尾泰貴
LIVEISM アーティスト	高田治／高田雄平／徳治昭／美和いちこ／くしげまち／藤村明日香／MITSUHOSHI／田河アパッチ／岩本紀羽／タカタニエミコ／岡優七／吉田琉平／ヨモモトマスヤ／ちあ紀／フィル
みせるばんど	梶原弘隆／泉谷徹二／中西進之輔／北村悠太郎
グラフィッカー	ニ瓶智充／グラフィックポート8080メンバーの皆様
ボランティア	髙尾周佑／廣常絵梨奈／川嵜有里奈

メンバー	チトセ工業／青戸金属／八尾金網製作所／アーテック／友安製作所／ユタニ／平井製作所／名張近鉄ガス／ミナミダ／カネエム工業／シルバー／アベル／多葉刷子工業所／ヤスオカ／赤坂金型彫刻所／松徳工業所／コダマガラス／松村釦／オーツー／藤田金属／ニシカゼ／木村石鹸工業／大一創芸／谷元フスマ工飾／旭食品／タカヨシジャパン／柏原計器工業／大和板紙／シンコーエステック／大阪糖菓／菊水テープ／フコク産業／和田萬／錦城護謨／ニットープロセス／三栄金属製作所／電研／生田／甲子化学工業／柳田製作所／渚技研／アイキ／M・Cケンマ／河辺商会／角野晒染／小泉製作所／ウッディーズ／常磐精工／ナカニ／中村超硬／奥谷金網製作所／河内鉄工所／馬場刃物製作所／つぼ市製茶本舗／ヤマトステンレス／シャープ化学工業／伸栄鉄工／高橋楠／ヤナギモト／真生印刷／郷田商店／住まい工房集／コンペイトウミュージアム堺／和泉利器製作所／イイノ／千総／八田工業／マツバラ金網／明和食品／浪速工作所／浦田工芸（Irisガラス工房）／関西貿易／堀田カーペット／福壽堂秀信／大阪富士工業／一瀬製作所／ウチダ／吉川鐵工／エムズコーポレーション／山田製作所／ワコーメタル／栗原木工／北次／三和歯車／森脇鉄工／栄光技研／ホーシン／マルイチエクソム／大日運輸／広伸／岩崎電装

パンフレット制作

企画・制作	Eat, Play, Sleep inc.
編集・クリエイティブディレクション	堤大樹
企画・編集	わかめかのこ（みつける・めぐる・はなす）
デザイン・アートディレクション	小林誠太
取材・執筆	木村有希（企業インタビュー）／白川烈（めぐる）
写真	岡安いつ美／渡部翼
イラスト	Studio Takeuma
印刷	真生印刷


FactōrISM
アトツギたちの文化祭